

# ユース提言活動 4年間のあゆみ

関西NGO協議会



SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS



# もくじ

はじめに .....	2
<b>第一部：活動のふり返り</b> .....	<b>3</b>
<small>※年度ごとの活動のふり返りの講師の皆さんの肩書は当時のものです</small>	
<b>2020 年度ユース提言セクション</b> .....	<b>4</b>
<b>2020 年度 提言書</b> .....	<b>7</b>
<b>2021 年度ユース提言セクション</b> .....	<b>20</b>
<b>2021 年度 提言書</b> .....	<b>23</b>
<b>2022 年度ユース提言セクション</b> .....	<b>31</b>
<b>2022 年度 提言書</b> .....	<b>34</b>
<b>2023 年度ユース提言チーム</b> .....	<b>46</b>
<b>2023 年度 提言書</b> .....	<b>49</b>
<b>第二部：皆さまからの寄稿</b> .....	<b>60</b>
ユース提言セクション 2021 伴走講師 <b>中道 貞子</b> .....	<b>61</b>
ユース提言チーム 2023 伴走講師 <b>林 大介</b> .....	<b>63</b>
2020-2022 サポーター <b>鈴木 千花</b> .....	<b>65</b>
ユース提言セクション 2020 メンバー、 ユース提言セクションサポートメンバー (2021・2022) <b>菅 礼実</b> .....	<b>67</b>
ユース提言セクション 2021 メンバー <b>れいな</b> .....	<b>69</b>
ユース提言セクション 2022 メンバー <b>T.H.</b> .....	<b>70</b>
ユース提言セクション 2022 運営ボランティアメンバー <b>こうたろう</b> .....	<b>71</b>
<b>ユース提言チーム 2023 メンバーからの一言</b> .....	<b>72</b>
<b>編集後記</b> .....	<b>73</b>

# はじめに

この冊子は、関西 NGO 協議会が取り組むユースイベント「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth」（以下ワンフェスユース）内における、2020 年度から 2023 年度までの 4 年間のユース提言活動のあゆみを記したものです。

このユース提言活動のスタートは、2018 年度のワンフェスユースにて行われた「SDGs ユースアジェンダ キックオフ大会」でした。キックオフ大会では、JYPS（Japan Youth Platform for Sustainability）と立命館大学 Sustainable Week 実行委員会のそれぞれのメンバーがファシリテーターを担い、参加者の皆さんは政策提言の方法について、ワークショップを通じて学びました。自分たちの考える理想とそこに到達するために必要なアクション等をバックキャストで考え、そのギャップを埋めていくプロセスを学ぶこのワークショップは、各年のユース提言セクション／チームでも、活動の最初に実施してきたものです。

このキックオフ大会の後 1 年を空けた 2020 年度のワンフェスユースにて、ユース提言活動は本格的に始動しました。ワンフェスユースの高校生実行委員会のシステム上、本活動は毎年新たなメンバーを募集する形のものでした。そのため、継続的なものというよりは、基本的には単年ごとの活動という形になりましたが、だからこそ、この 4 年間の活動を通して、幅広いテーマを扱うこと、幅広い層に働きかけることができたのだと思っています。

冊子は二部構成です。第一部では、4 年間の活動を年度ごとに順番にふり返っています。セクション／チームの立ち上げからワンフェスユース内のシンポジウムの開催を経て、提言書／動画の完成や提言の機会に至るまでを簡単に記しつつ、併せて各年度のセクション／チームが作り上げた提言書の全文と提言動画の一部を掲載しています。そして第二部では、この 4 年間の中で、伴走講師・サポーター・セクション／チームメンバーとしてこの活動に携わってくださった皆さんの中から一部の方々に、活動をふり返って原稿を寄せていただいたものを掲載しています。

ユース提言活動の 4 年間のあゆみを、そしてそれぞれの視点から見るユース提言活動を、本編にてぜひご確認ください。

# 第一部 活動のふり返り

2020年度  
ユース提言セクション

## 2020年度 ユース提言セクション

テーマ 差別・貧困

### 提言講師

三輪敦子さん  
関西 NGO 協議会代表理事、  
SDGs 市民社会ネットワーク共同代表理事

### 始まり

2020年9月に立ち上がった、ユース提言セクション（以下アドセク）2020。2回のオンラインミーティングを経て、メンバー全員で選んだテーマは「差別」と「貧困」でした。そこからまずは、関西 NGO 協議会の代表理事であり、SDGs ジャパンなどで提言活動をしている三輪敦子さんから、「提言／アドボカシー」について事前のレクチャーを受けました。

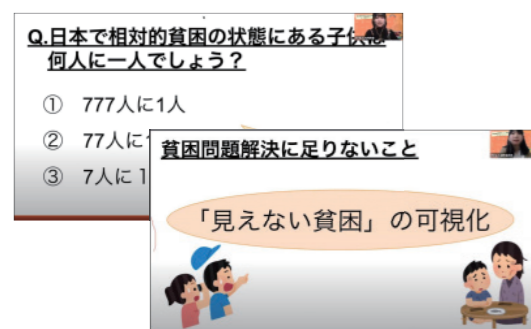
そして「差別解決チーム」と「貧困解決チーム」に分かれ、自分たちの提言（ユースアジェンダ）の策定とワン・ワールド・フェスティバル for Youth（以下ワンフェスユース）2020 Online 内で開催されるシンポジウムに向けて、それぞれ何度も話し合いを重ねながら活動を進めました。

またアドセク 2020 のメンバーが目指したのは、自分たちと同年代の人びと、“ユース”に向けた提言です。社会が抱える課題は決して他人事ではなく、自分たちにも深く関わっているのだということを伝えたい、また、そうした課題に関心はあるものの実際の関わり方がわからないという人が一歩を踏み出せるようにしたい、あるいは関心のない人に関心を持ってもらえるようにしたい、これらの思いを胸に、一生懸命に取り組みました。

### シンポジウムの開催

2020年12月20日（日）、ワンフェスユース 2020 Online が開催され、その中の一つのプログラムとして、アドセクによるシンポジウム「ユースからの提言 ～差別・貧困の視点から考える私たちの未来～」が行われました。

アドセクのメンバーが自分たち自身で様々な調査やアンケートなどを実施し、その成果をスライドにまとめて発表しました。



貧困解決チームの発表の様子



差別解決チームの発表の様子

またこのシンポジウムは、アドセクメンバーによる、自分たちと同年代のユースに向けた提言の場でもありました。アドセクメンバーは、ユースに向けて提言をするだけでなく、自分たち自身の「プチ宣言」も行いました。

### プチ宣言

- ・他人の意見を恐れず活動を広げる
- ・自分の経験についてもっとオープンになり伝えたいことを発信する
- ・署名活動など、自分が出来ることにもっと積極的に参加する
- ・大学で貧富の格差の問題をさらに詳しく学び、ボランティア活動などに積極的に参加する
- ・身近なところからボランティア活動に参加する
- ・実際に子ども食堂などボランティアに参加してみる



当日は、シンポジウムとワンフェスユース全体の閉会式での発表とを合わせて、のべ200人以上の高校生が参加し、アドセクメンバーの言葉に耳を傾けてくれました。また、そうした参加者の高校生の皆さんからは、

- ・自分にも今すぐできることが知れて良かった
- ・私たちにもできることがあるとわかったし、できる限りのことをしたい
- ・発表がわかりやすく、とても聞きやすかった
- ・このシンポジウムに参加して本当に良かった

など、たくさんの感想をいただきました。それを聞いて、アドセクメンバー自身も、「伝えたいことが伝わったと実感できた」「頑張ってきて良かった」などのポジティブな感想を持つことができました。

### 提言書

ワンフェスユースでのシンポジウムを経て、アドセクメンバーは提言書を完成させました。7ページからはその提言書の全文を掲載しています。高校生が社会に届けたいと思った「声」を、ぜひご確認ください。



# 他人事じゃない貧困・差別問題

～ユースで作り上げる持続可能な未来～

## 全体提言

私たちが高校生の皆さんに伝えたいことは以下の4つです。

- ① 発展途上国だけでなく現在の日本も抱えている課題がたくさんあるということ
- ② 提言書でこれから取り扱う、貧困や差別の問題は決して他人事ではなく自分たちにも関わっていること
- ③ 私たち高校生にも起こせるアクションがたくさんあるので、もっと社会の問題に積極的に関わっていく必要があること
- ④ 社会の問題に積極的に関わってほしいこと

関心はあるけれどどうやってアクションを起こせばいいのかわからなかった人、これまで関心がなかった人が、活動し始めるきっかけになってほしいです。

本文でこれらのことを貧困と差別の2つの問題に焦点を当て、私たちから高校生の皆さんに向けた提言をします。

## 子どもの貧困問題についての提言

- 貧困問題について関心を持つ  
日本でも貧困に悩む子どもたちはたくさんいるのに、それが見えにくいというのが一番の課題である。貧困問題に関する講演会に参加したり、SNSなどを使って貧困問題についての現状や解決策を発信する。
- ボランティア活動への参加  
自分の興味のある活動をしている団体などを調べ、積極的に活動に参加する。実際にNPO,NGOなどが行っている放課後ボランティアや無料塾に参加する。
- お金や物資の供給による物資的、精神的な支援  
貧困に悩む子どもを支援するNPO,NGOなどへ寄付したり、自分は着れなくなったがまだ着ることができる衣服などを寄付する。
- 知ったことを周りの人に伝えていく  
学んだこと、知ったことを身の周りの人に伝えることは自身の学びをさらに深めることになる。

## 外国人差別・LGBTQ+(SOGI)差別についての提言

- 情報の受け取り方を振り返る  
自分が知らないことがあって当たり前で、知らなかったことを学んでいくということが求められる。誰かに教えられたこと・メディアやインターネットを通じて知った政治的差別的な考えで国のイメージやその国の人が考えていることを決めつけること、国際問題などの国同士の関係を、その国出身の人との関係に影響させることをしていないか、振り返る。国と国との間の政治的な関係と、身近な外国籍の人たちとの関係は切り離して考えることが重要。
- 「自分が差別されたら...？」を想像する

差別は立場が変われば自分に帰ってくることもある。日本に住む私たちは、海外に行けばそこでは外国人になり、差別や偏見の対象になることがある。「外国人」という属性はどの視点から見ると変わるようになる。それを頭に入れれば差別というものの残酷さや人を傷つける力を理解できるのではないかな。

- 人の数だけジェンダーがあることを理解する  
セクシュアリティは、その人のアイデンティティの重要な部分である。ジェンダー意識・ジェンダーの現れ方は人の数だけ存在する。誰かがあなたに自身のセクシュアリティについてカミングアウトした場合には、個人にとって大切なアイデンティティであるセクシュアリティを伝えてくれたことを理解し受け入れることが重要。多様なセクシュアリティについて、常にあなた自身の理解をアップデートすること、自分の勝手な理解に基づいて人のアイデンティティを決めつけないことが重要。

## 見えない子どもの貧困 ～私たち一人ひとりに出来ること～

### 目次

全体提言	1
私たちは特に貧困と差別の二つの問題について提言する	1
子どもの貧困問題についての提言	1
外国人差別・LGBTQ+差別についての提言	2
提言	2
見えない子どもの貧困 ～私たち一人ひとりに出来ること～	4
先進国の子どもの貧困状況	4
イギリスの貧困状況	4
イギリスの対策	5
背景	5
現在イギリスで行われている対策	5
日本の現状	6
子どもの貧困問題(教育格差と健康面)	6
日本で今行われている取り組み	7
それでもなお解決に向け足りていないこと	8
<ユースからの提言>	8
私たちにできること	8
日本政府やNPO・NGOなどの大人の人に増やして欲しい活動	8
外国人・LGBTQ+差別に対して	9
はじめに	9
体験談	10
客観的な視点(アンケート結果より)	10
まずは知ることから(正しい情報を得ること)	11
周りの人の発言に惑わされないようにすること	11
差別を止める勇気を持つこと	12
提言	13
みんなにできること	14
日々できること	14
あなたにできること	14

### 先進国の子どもの貧困状況

先進35カ国に住む子どものうち、およそ15%に当たる約3,400万人が貧困家庭に暮らす。

- 日本の子どもの相対的貧困率は15.7%(34カ国中10番目)であり、日本国内の約1,512万人の子どものうち、およそ260万人の子どもの貧困家庭で暮らしている。
- アメリカ合衆国は21%(34カ国中5番目)
- イギリスは10%(34カ国中22番目)

※先進国34カ国:アメリカ合衆国 アイルランド アイスランド イスラエル イタリア イギリス エストニア オーストラリア オランダ オーストリア カナダ 韓国 ギリシャ スペイン スロバキア スイス スロベキア スウェーデン チリ チェコ デンマーク トルコ ドイツ 日本 ニュージーランド ノルウェー ハンガリー フランス フィンランド ベルギー ポルトガル ポーランド メキシコ ルクセンブルグ  
※子どもの相対的貧困率:全子ども数(15歳以下)に対する貧困ライン(1日1.90ドル)未満で暮らす子どもの割合

(参考: [ユニセフ・イノチェンティ研究所『Report Card 10-先進国の子どもの貧困』](#)  
[国際協力NGO ワールド・ビジョン・ジャパン](#))

### イギリスの貧困状況

ここで1つの解決策の例として、イギリスをあげる。イギリスを具体例に挙げた理由は三つある。1つは同じ先進国であること、2つ目はイギリスは政府の対策が多いこと、そして3つ目は貧困率の低下が見られることである。

イギリスの子どもの相対的貧困率は1997年～2007年の10年間で26%から18%まで低下し、特にひとり親世帯の子どもの貧困率は49%から22%へと低下した。この数字を考えると、貧困をなくすためにかなりの成果を上げているといえる。(イギリスは日本より広く貧困層を捉えて貧困率を算出しているため貧困率の数値が高い)

### イギリスの対策

日本との大きな違いは、貧困に対する法律に数値的目標を設定し、貧困解決に向けた対策の進行状況を毎年国会にて報告し、対策の戦略を3年ごとに策定することを義務付けていること。また、社会保障給付は見直しを行うことはあっても教育関係の予算を削減していないことも挙げられる。

#### ワーキングプア対策

1999年、イギリス労働党のトニー・ブレア首相(当時)が、「2020年までに子どもの貧困をなくす」と宣言して以降、政府は「公正な社会」の実現を目指し、多くの対策を打ち出してきた。世界同時不況や政権交代を経た今もその試みは続いている。ブレア政権は所得保障、親の就労支援、子育て支援を3本柱に据えた。

### 現在イギリスで行われている対策

- **WINTER PACKAGE**

地方自治体が低所得世帯に配布するための新しい「Covid Winter Grant Scheme」を含む、この冬の全国の貧困を緩和するためのいくつかの新しい措置を発表。子ども、家族、そして冬の間最も脆弱な人々を支援するための1億7000万ポンドの支援。

● **児童特別補助(ピューピル・プレミアム)**

親が無職あるいは低所得で貧困状態にある児童の数に応じて学校に給付される補助金。学校はこれを使い指導員の増員や放課後学習支援、朝食クラブなどの取り組みを行っている。

● **朝食クラブ**

学校が上記の児童特別補助(ピューピル・プレミアム)をつかい、始業前に朝食を家でとることのできない児童に朝食を提供する取り組み。

● **タックスクレジット**

現金給付をする支援で、16歳未満の子どもがいて納税額が一定を下回る低所得世帯へ給付される「児童タックスクレジット」と、親が就労している低所得世帯に給付される「就労タックスクレジット」があった。現在は「ユニバーサルクレジット」と名を変え、上記2つに加えて、求職手当、所得補助など6種類を統合して低所得者向けの新しい支援に変わっている。

● **児童センター**

親まで含めて困窮家庭を丸ごと支援する拠点として、貧困率が高いイギリス全国3千カ所以上に設置。「貧困によって親の養育が行き届かず才能を伸ばす機会が奪われないように」と、乳幼児や親向けのプログラムを実施し、求人情報の提供など親への就労支援も行っている。

(参考:

[エンド・チャイルド・ポパティ](#)

[チャンス・フォー・チルドレン](#)

[英国の子どもの貧困対策 公正な社会へ試み続く | 関連記事 | 希望って何ですか 貧困の中の子ども | 下野新聞 SOON\(スーン\) \(shimotsuke.co.jp\)](#)

## 日本の現状

貧困には「絶対的貧困」と「相対的貧困」があり、日本で問題視されている貧困は、相対的貧困に当たる。

○「絶対的貧困」とは

着るものがない、食べるものがない、住む場所がないといった、衣・食・住において、人間としての最低限の生活を営むことができない状態のこと。

○「相対的貧困」とは

国民の年間所得の中央値の50%に満たない所得水準の人々のことを指し、国の生活水準や文化水準を下回る状態のこと。日本は相対的貧困率が先進国の中でも特に高いとされている。

2016年に発表された世界の貧困率比較では、日本は世界で14番目の15.7%となっている。先進国の中では中国やアメリカに次いで3番目となっており、先進国の中でも貧困率が高いことが伺える。

また世帯構造別で言えば、ひとり親世帯の貧困率は2015年で50.8%となっている。

(参考:[厚生労働省公式サイト](#))

## 子どもの貧困問題(教育格差と健康面)

日本国内の7人に1人の子どもが相対的貧困の状態にある。また、そうした状態にあることにより、以下のような問題が挙げられる。

◎教育格差

- ・貧困は学力低下につながる要因になり、社会的損失に直接つながる可能性がある。
- ・貧困が原因で塾や習い事など、学校以外で学習する機会が少ないことも教育格差に繋がる。
- ・進学ができないということは非正規雇用や低い給料で働かざるを得ない。

(参考:[貧困家庭の子どもの生活習慣や健康に与える影響は？子どもの暮らしを支援する取り組みとは](#))

## 日本で今行われている取り組み

・子ども食堂

子どもにとって必要な栄養のある食事を提供する「子ども食堂」という場所がボランティアにより開かれている。

ここでは非常に安い値段で子どもの成長に必要な食事をとることができる。子ども食堂は貧困に苦しむ子どもはもちろんのこと、その親も利用できるため、親子でコミュニケーションを取ることができる場所にもなる。

また他の同じような境遇にある子どもや家庭も集まるため、気軽に相談し合えるコミュニティとしての役割も果たし、子どもや親の精神的な安定にもつながる。

全国の「子ども食堂」が2,200か所を超え、少なくとも2,286か所に達している。

そこに来ている子どもの数は、年間で延べ114,580人。

(参考:[子ども食堂2,200か所超える 2年で7倍以上 利用する子どもは年間延べ100万人超\(湯浅誠\) - 個人 - Yahoo!ニュース](#))

・放課後教室などの教育支援

塾や習い事に通えない子どもを対象とした放課後教室などの教育支援も行われている。

ここではボランティア講師が、経済的な理由で学校以外の場で学べない子どもたちの学力支援やスポーツ・文化芸術活動等の機会を提供している。

全国でこのような活動が広がっており、子どもたちへの支援の輪が確立されようとしている。平成29年時点で、17,615教室ある。

<利用者の声>

保護者からは、「学校や親が教えることが難しいことも体験活動を通じて子どもに上手に教えてくれる。」「学校から帰宅した際、子どもとの会話が増えた。」「参加したことによって友達が増えた。」と好評。

(参考:[放課後子供教室の取組・現状・課題について \(cao.go.jp\)](#))



## ・保護者への支援

保護者への支援としては経済的負担率を減らすための支援制度の制定や、児童扶養手当の支給、医療費などの無料化の動きなどがある。

また、より収入の多い仕事につくための就労支援やキャリアアップ支援、保護者の子育て力向上のための個別支援なども行われている。

保護者の生活支援を行うことで、物質的、精神的な課題の解決を図っている。

それでもなお解決に向け足りていないこと

→現在、上記のような取り組みが貧困な状態にある子どもたちを支援している。しかし、支援には資金や人手が必要である。また、「見えない貧困の可視化」が必要だ。

## &lt;ユースからの提言&gt;

私たちにできること

## ・貧困問題について関心を持つ

貧困問題を伝えるための講演会への参加。  
SNS等で貧困問題について解決策などを発信するなど。

## ・ボランティア活動への参加

自分が興味のある活動をしている団体などを調べ、積極的に活動に参加する。  
実際にNPOやNGOなどが行っている放課後ボランティアや無料塾に参加する。

## ・お金や物資の供給による物質的、精神的な支援

貧困に悩む子どもを支援するNPO等へ寄付をする。  
自分は着られなくなったが、まだ着ることができる服等を寄付する。

(参考: [日本の貧困の現状は？貧困率の推移や背景とは](#))

## ・知ったことを周りの人に伝えていく

日本政府やNPO・NGOなどの大人の人に増やして欲しい活動

## ・子ども食堂等への助成金支給

→東洋大ライフデザイン学部の関屋光泰助教が、「子ども食堂」のボランティア活動参加者にインターネットでアンケートした結果、子ども食堂が継続できるかどうか、7割が不安を抱いている実態が明らかになった。「子ども食堂」の運営には、「子ども食堂内の人間関係のストレス」「人と資金の不足」「ボランティアの高齢化」など様々な問題がある。ボランティアの方は、相談窓口や交通費などの助成を求めている。

「子ども食堂」が増加する一方、閉鎖を余儀なくされる場合もある。行政や中間支援組織がこれらの支援を拡充できるか否かが、今後の活動継続を左右する。

(参考: [増え続ける子ども食堂でも7割が「継続に不安」人手や資金不足、高齢化... 埼玉でボランティアアンケート](#))

## ・相対的貧困家庭の現状認知かつ十分な支援の普及

## ・貧困家庭への支援金の増額

## ・子育てをしやすい地域コミュニティの形成、社会全体での積極的な子育て支援体制の構築

→日本の貧困家庭にはひとり親が多く、その場合家事と仕事、育児をすべて一人でこなす必要がある。そうすると、金銭的な問題の他、日々の疲労からくるストレスが身体的・精神的な問題にもつながる。しかし、子育てを一人で抱え込まずに済む、いつでも誰かに相談できるような支援体制や社会が実現すれば、「見えない貧困」に苦しむ家庭は減るのではないだろうか。

## ・日本の貧困の現状を、多くの人に知ってもらえるような啓発活動の実施



## 外国人・LGBTQ+差別に対して

### ～自らの経験から考えた理想の未来図～

#### 目次

1. はじめに
2. 体験談
3. 客観的な視点(アンケート結果より)
4. 提言
5. みんなにできること

## 1. はじめに

差別という概念はどこから生まれるのでしょうか。想像して見てください、もしあなたと目の前にいる人の間に壁があったとしたら。相手の顔は見えません、性別も性格もわかりません、喋ってくれるまでどんな喋り方をする人なのか、どの言語を喋るのかもわかりません。それでも差別は起きるのでしょうか。

私たちは目に見えるものを区別してしまうことがあります。そしてその区別が差別へと繋がることもあります。もしみんな同じ人間なんだという理念が全ての人の中に根付いていたとしたら、差別というものは無くなるのではないのでしょうか。

これから私たちは自分たちの経験やアンケートから得た学生さんたちの意見を交えて外国人差別やLGBTQ+差別に対する意見や考え方をまとめ、これからの世代に伝えたいことを主張します。

## 2. 体験談

- (提言セッション高校3年生)
  - i. 中学生の時、近所の格安店を訪れていた中国からの観光客のマナーの悪さに、「中国の人全員がこのようなマナーではない」と分かっている、「中国の人はマナーが悪い」という偏見を持ってしまった経験があります。今、私は、学校などの1つの社会集団の中に様々な性格の人がいるのと同じように、様々な国籍や肌の色、性自認や性的指向があり、それぞれの人に違った感じ方や考え方があることに誰もが気づいていく必要があると思っています。
- (提言セッション高校1年生)
  - i. インターナショナルスクールにずっと通っていて友達と電車で英語で喋るだけで同年代、そして大人から日本語で差別の言葉を浴びてきました。日本人として海外に行った時、「Jap」などと差別用語を使われたり、「英語うまいね」(アジア人の英語の能力への期待度が低い、相手は差別だと思っていない)と言われて日本人として不快感を感じていました。自分たちがされたくないであろう差別を日本人が平気でしていることに対しても苛立ちを感じていました。LGBTQ+

に関してても同性にちょっとでも興味がある自分を日本は社会として批判していてLGBTQ+を嫌うことを教えられてきたので、自分の頭も自分を差別しているという現実があります。(ここ、この理解でいいでしょうか???)当事者の重要なアイデンティティーをどうして簡単に「気持ち悪い」「怖い」と言えるのか理解できません。知るべきことは知って欲しいです。人の命がなくなる前に。

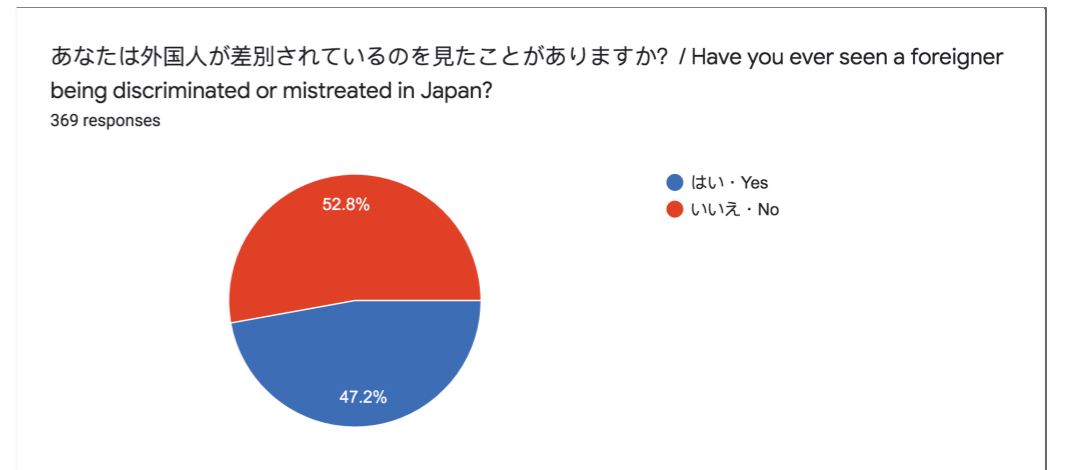
- (提言セッション高校1年生)
  - i. 日本で育った外国人として、非白人として、東南アジア人として、様々な形での偏見や差別を経験して育ちました。差別される理由の中で一番大きいと言えるのが肌の色。「肌色」というのは一色しか存在しないという考え方があって、それによって5歳児だったころから自分の暗めな肌色は「気持ち悪い」などとされてきました。人々が差別的な考えさえ持っていなかったら傷つかずに済んだのかもしれない。同じような経験をした人たち全員傷つかずに済んだのかもしれない。

## 3. 客観的な視点(アンケート結果より)

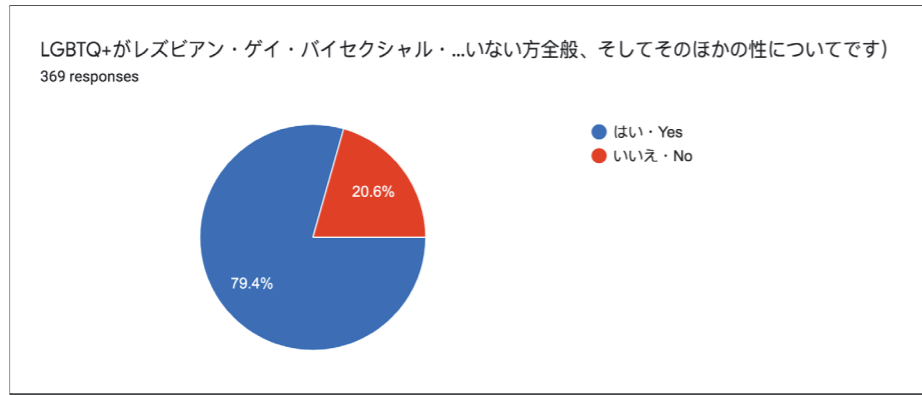
私たちはアンケートを実施し、中高生の外国人差別やLGBTQ+差別に対する知識や考え方を調べました。その結果からこのような差別を無くしていくためにみんながやらなければいけないことは以下のようなことだと考えました。

### ○ まずは知ることから(正しい情報を得ること)

- i. 外国人が差別されているのを見たことのない人が約半分。目に見えないものは存在しないと勘違いしやすいのでまずは差別が存在すると言う事実の理解が必要です。

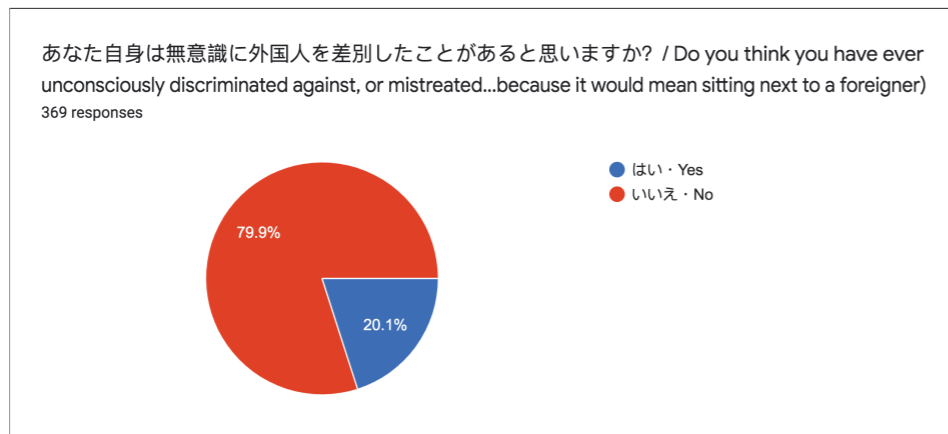


- ii. LGBTQ+という言葉がどのような意味なのか知らないと答えた人が2割程度。意味を理解し存在を受け入れないと、問題と向かい合うこともできませんし差別をなくすこともできません。

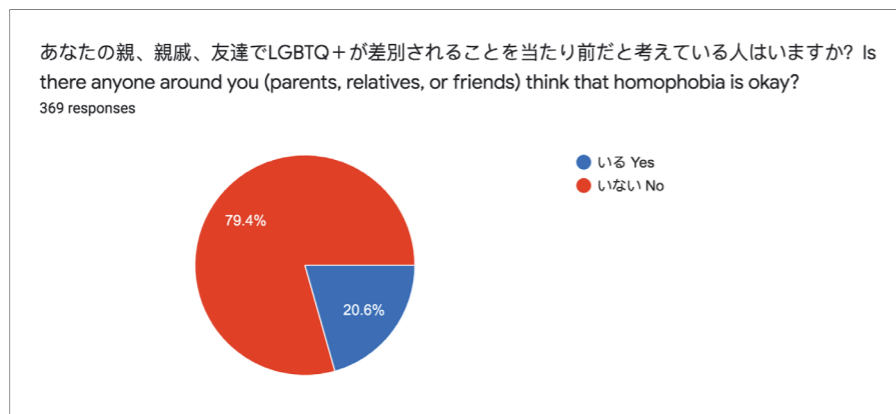


○ 周りの人の発言に惑わされないようにすること

- i. 「外国人は〇〇だから関わらないほうがいい」「外国人は〇〇だから悪い人たちだ」などような無責任で根拠のない発言に惑わされては差別は無くなりません。約2割の回答者が「無意識に外国人を差別したことがある」と答えた理由も周りの影響が関係しているのではないのでしょうか。

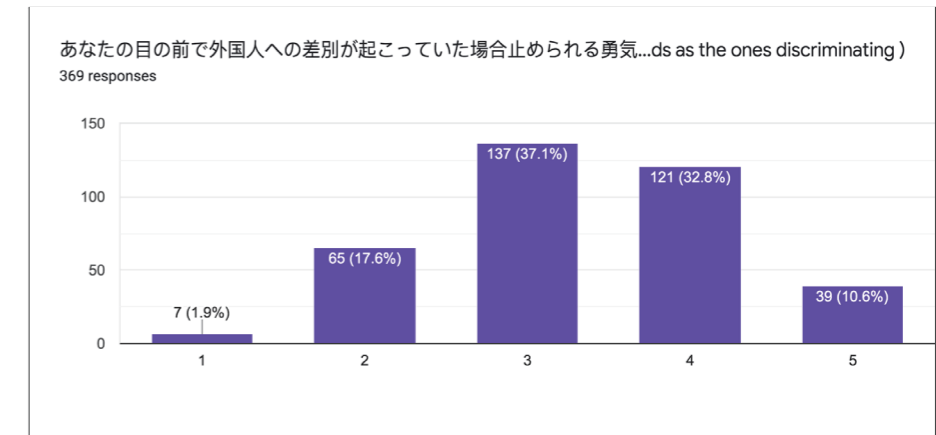


- ii. 「周りの中でLGBTQ+の人たちが差別されることが当たり前だと考える人は居ますか」という質問に対して「はい」と答えた人が2割程度。差別を無くそうとしている今、このような人たちが少しでもいることは問題です。差別が当たり前だと答える人の発言には惑わされずにどんな人でも受け入れられる心を持たなければなりません。



○ 差別を止める勇気を持つこと

- i. 「目の前で差別が起こった時に止める勇気がある」と答えた人(1~5の間で答えられる形式で5と答えた人)は1割程度。4割の回答者が3(丁度真ん中)を選んだことにより、差別を止める勇気があると確信を持てる人は少ないと言える。



4. 提言

- 自分が知らないことがあって当たり前で、その知らなかったことを受け入れていくということをみなさんにしてほしいです。誰かに教えられたこと・教科書に書いてある政治的差別的な考えだけで国のイメージやその国の人を決めつけること、国際問題などの国同士での関係を身近な外国の人との関係に影響させるのはよくない。
- 日本国内で外国人を差別したら、日本人がもし海外に行ったらその人はそこで外国人になるということを忘れておくことになる。「外国人」という肩書きはどの視点から見るとによって変わるものである、それを頭に入れた上で差別というものの不必要性と人を傷つける力を理解する必要がある。
- LGBTQ+の人たちは、セクシュアリティがその人のアイデンティティである。誰かが決めるものではない。ジェンダーとは人口の数だけ存在する。誰かがあなたに自身のセクシュアリティについてカミングアウトしたとしてもその人の根本的な人間性は変わらない。誰かについて、自身が全てを理解していると思いついて人のアイデンティティを決めつけないことが大事なのではないでしょうか。
- 結局はみんな同じ人間なのに、差別をしてしまうことが問題であり、人間性と外見、人間性とセクシュアリティは無関係である。人間はお互いにサポートしていかないといけないのにも関わらず、この社会に差別は根深く存在している。人種、外見、セクシュアリティ、その他自分たちではコントロールできないことに対して差別的な考え方を持たない、そして差別的な態度を取らないことが大事である。偏見というのは根拠のないステレオタイプによって他人のイメージを決めつけること。差別というのはその偏見によって他人に対する態度を変えること。

## 5. みんなにできること

### 日々できること

- みんな同じ人間だということを意識する
- 差別はしてはいけないことだと理解する
- 無意識な差別をしてしまっている時に自分が差別されている相手の立場だったらどう思うか
- 差別を止める勇気をもつ
- 授業内容や、家族、そしてテレビなどのメディアが言っていることでも事実かどうか見極める
- ハイレベルな外交問題を身近な外国の人との関係にまで引きずる危険性を考える

### あなたにできること

- 黒人差別反対などの請願書に署名する

アメリカでは黒人1000人につき一人が警察によって殺されてしまっているのが現状です。下のリンクは今年殺害されてしまった二人の加害者を逮捕を要求する請願書です。一人でも多くの署名で変化を起こすことができます。SNSなどで見かけても信用できるものだと確認してから署名を積極的にしましょう。

- Breonna Taylor:  
<https://www.change.org/p/andy-beshear-justice-for-breonna-taylor>
- <https://act.colorofchange.org/sign/justiceforbre-breonna-taylor-officers-fired/>
- George Floyd:  
<https://www.change.org/p/mayor-jacob-frey-justice-for-george-floyd>
- [https://act.colorofchange.org/sign/justiceforfloyd\\_george\\_floyd\\_minneapolis/](https://act.colorofchange.org/sign/justiceforfloyd_george_floyd_minneapolis/)

- この動画を見てBLMに貢献:

BLM(今年アメリカでGeorge Floydさんが警察官に首をしめられ死亡した事件から始まった黒人差別反対の運動)をサポートしたいが自分のお金で寄付できない人のためにあるユーザーが黒人アーティストの作品を動画にし広告をたくさんつけることによって視聴するだけでBLMの活動に寄付されるようになっていきます。広告をとばさないで朝の用意をしている間に流しておくのがおすすめです。

- <https://www.youtube.com/watch?v=bCqLa25fDHM>
- LGBTQ+の理解を深める講演会・セミナーなどに参加する
  - NPO法人虹色ダイバーシティさんのページにあるLGBTQ支援団体リストをご覧ください:  
[https://nijirodiversity.jp/lgbt\\_support/](https://nijirodiversity.jp/lgbt_support/)
- 同性婚を認める動画に視聴率をつける:
  - 2020年11月26日13時に開催された一般社団法人Marriage For all Japan主催の マリフォー国会の第2弾は国会議員が日本の同性婚の現状を議論する国会です。このリンクはその国会のライブ視聴の動画で視聴者の数で関心の高さ同性婚へのサポート、関心を表せます!  
<https://www.youtube.com/watch?v=LQp5trJVlJM&feature=youtu.be>

2021年度  
ユース提言セッション



## 2021年度 ユース提言セクション

テーマ 環境・貧困

### 伴走講師

【環境】佐竹敦子さん  
環境活動家・ドキュメンタリー映像作家

【貧困】中道貞子さん  
奈良女子大学国際交流センター客員センター員、  
生物教育研究所研究員

### 始まり

2021年9月にユース提言セクション（以下アドセク）2021が立ち上がり、2021年度のアドセクの活動が始まりました。2021年度のアドセクメンバーが話し合って選んだテーマは環境と貧困の2つでした。そして海洋プラスチック問題を扱う環境チームと、アフガニスタンの教育問題を扱う貧困チームに分かれて、それぞれ活動を進めました。

そして、2021年12月19日(日)のワン・ワールド・フェスティバル for Youth (以下ワンフェスユース) 2021 Onlineにて、アドセク2021によるシンポジウム「持続可能な未来のために～環境と教育の視点から～」が開かれました。

### 環境チーム

環境チームは、映画「マイクロプラスチック・ストーリー～ぼくらが作る2050年～」の共同監督である佐竹敦子さんに自分たちで依頼をし、伴走講師として関わっていただくことに。具体的には提言内容の確認やアドバイスをさせていただきました。「マイクロプラスチック・ストーリー」は、ニューヨーク・ブルックリンの小学生たちがプラスチック汚染問題解決に向け立ち上がった様子がおさめられたドキュメンタリー映画で、2022年4月2日には、関西NGO協議会主催で自主上映会も実施しています。

ワンフェスユースのシンポジウム当日、貧困チームのパートでは、伴走講師の佐竹さんに講演いただき、その後参加者の高校生と一緒に提言の内容を検討しました。そして後日、環境チームは学校に向けた提言書を完成させました。

この提言のために、自分たちの通う高校でペットボトルの消費量等の調査をし、実際にアクションを起こした場合にどれだけのプラスチック削減が可能となるのか、データを集めました。



シンポジウムの様子

データの裏付けのある、とても説得力のある提言書になっています。ぜひ、23ページからその詳しい内容をご確認ください。

また、環境チームはこの提言書で自分たちの学校に対し、「プラスチックの使用量を減らすため、自動販売機をやめてウォーターサーバーを設置してほしい」と提言を行いました。その後少し時間がかかったものの、現在の環境チームの学校には、実際にウォーターサーバーが導入されています。

### 貧困チーム

貧困チームは、生物教員でありながら2002年からアフガニスタンの教育に携わり続けてきた中道貞子さんに自分たちで依頼をし、提言内容の確認やアドバイスをさせていただき伴走講師として関わっていただきました。そして、自分たちと同世代の高校生に向け、提言“書”ではなく、提言“動画”という形で自分たちが調べたこと・伝えたいことをまとめました。

シンポジウムの貧困チームのパートでは、中道さんに講演をいただき、そしてこの提言動画を参加者の高校生に向けて発表しました。ここで示された、高校生に向けた具体的な提言の内容は以下の3点です。

- ①正しい知識を持ちその情報を広めること
- ②関心を持ち続けること
- ③多くの人と繋がりを持ち、考えを共有すること

動画の内容は、一部を抜粋して30ページに掲載しています。実際の動画を載せているYouTubeに飛べるQRコードも併せて掲載していますので、ぜひご覧ください。

またYouTube上では、日本語・英語両方での字幕を用意しており、さらに概要欄には、日本語が得意でない方や高校生よりも低い年齢層の方に向けて、同じ内容をよりやさしい日本語で掲載しています。貧困チームの想いが込められた字幕や概要欄にも、ぜひ目を向けてみてください。



# 持続可能な未来のための提言

～環境の視点から～

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth2021 ユース提言セッション

## 全体提言

私たちが海洋プラスチック問題について学校の関係者の方々に伝えたいことは以下の二つです。

- 現在、学校で消費されているペットボトルの量を知ること
- 学校にドリンクサーバーなどペットボトルを使用しないような設備を導入し、ペットボトルの消費量を減らすこと

海洋プラスチック問題は個人のちょっとした意識変化だけでは変えようもないものです。そして、ペットボトルがどのように地球に影響を与えているのかを知り、学校という大きな組織に自動販売機ではなく、ドリンクサーバーやウォーターサーバーを設置するアクションを起こし、学校全体でペットボトルの量を減らして行くために私たちは学校に提言します。

# 目次

1. はじめに.....	3
a. この提言書について	
2. 海洋プラスチック問題とは.....	3
3. ペットボトルが地球に与える影響.....	3
a. 海洋ゴミのペットボトルの割合	
4. 学校で消費されているペットボトルの量.....	4
a. 私たちの学校の生徒のドリンクの持ち歩き方についてのアンケートデータ	
5. 学校にしていきたいこと.....	6
a. 実際にしていきたいこと	
b. 自治体が実際に起こしているアクションの例	
6. 提言.....	7

### 1. はじめに

この提言書はワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2021 でのシンポジウム内で参加者のみなさんと一緒に考えた案をまとめ、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2021 の高校生実行委員である私たちが通う学校で、その案を実際に実践し結果をまとめたものです。そのため、この提言書は私たちだけではなく当日シンポジウムに参加して下さった参加者の方と共に創り上げた提言書になります。

### 2. 海洋プラスチック問題とは

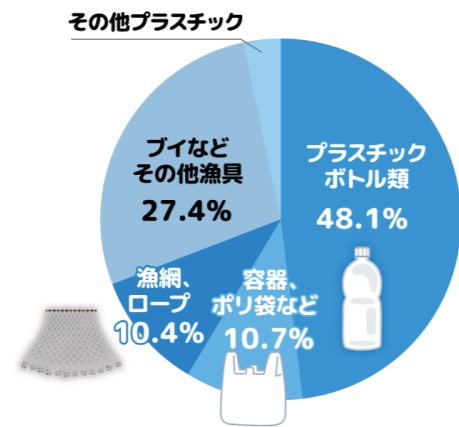
プラスチック製のペットボトルや容器などが、ポイ捨てや適切な処分がされていないことにより海に流され、海洋プラスチックごみになります。プラスチック問題は海洋だけの問題ではなく、気候変動、地球全体に関わっていて生態系に大きな影響を与えています。

実際に海洋ごみの影響により、海洋哺乳動物など約 700 種類もの生物がプラスチック製品を餌と間違えて飲み込んでしまい、それが体内で消費されず腸閉塞になったり内部を傷つけられたりしています。また、そうした動物たちは死に至る場合があります。

(<https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/3776.html>)

### 3. ペットボトルが地球に与える影響

令和元年に環境省が調査した海のプラスチックゴミの内訳では、ペットボトルの割合が非常に多くなっています。



引用 : <https://www.ecodane.jp/plastics-smart/house-trash.html>

(環境省 HP より孫引き : [https://www.env.go.jp/water/marirne\\_litter/conf/02\\_02doukou.pdf](https://www.env.go.jp/water/marirne_litter/conf/02_02doukou.pdf))

なぜ、ペットボトルの使用量を削減しなければならないのでしょうか。上記の海洋プラスチックごみの内訳の割合をみても、ペットボトルごみの量が群を抜いて多いことから、ペットボトルを削減出

来れば海洋プラスチックごみや、ペットボトルを焼却する際に出る二酸化炭素の量を大幅に削減し、気候変動に抗うことに繋がるといえるからです。

### 4. 学校で消費されているペットボトルの量

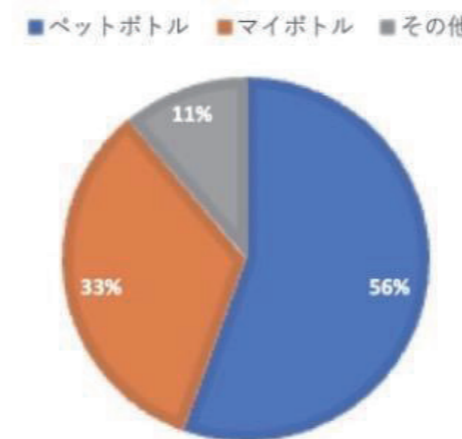
2022年1月7日(金)、私たちの通う学校(大阪 YMCA 国際専門学校国際高等課程国際学科)で実際に皆さんがどのようにドリンクを持ち歩いているのかを調査するためにアンケートを実施しました。条件や結果は以下の通りです。

#### 条件

- 日程
  - 2022年1月7日(金)
- マイボトルの持参人数
  - ペットボトルの使いまわしは含まれない
  - ペットボトルを買わなくていい入れ物ならマイボトルに含む(タンブラーなど)
- ペットボトルの持参人数
  - リサイクルマークがついているもののみ
  - プラスチックの容器は入りません(例:ヨーグルトの飲み物、コンビニエンスストアのプラスチック容器など)

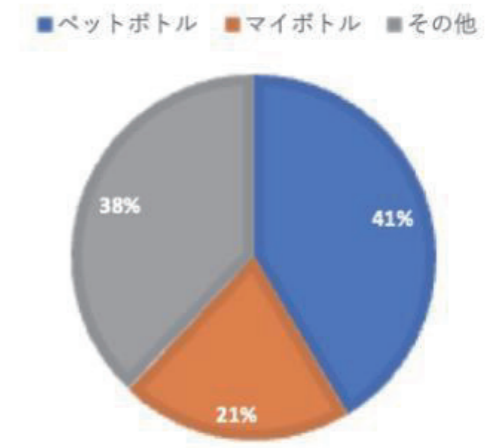
#### 結果

1年生のペットボトル持参数



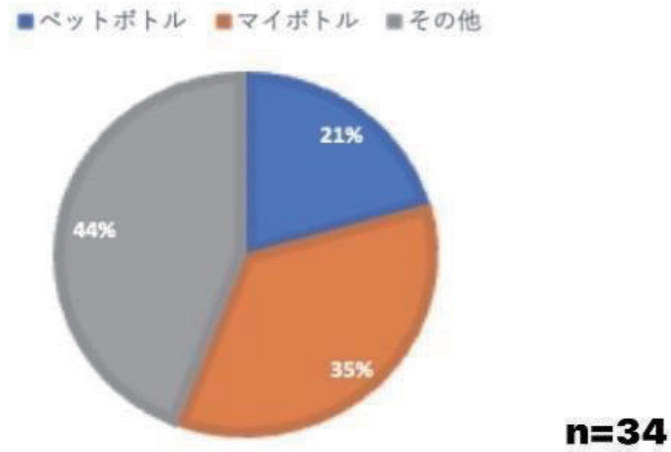
n=18

2年生のペットボトル持参数

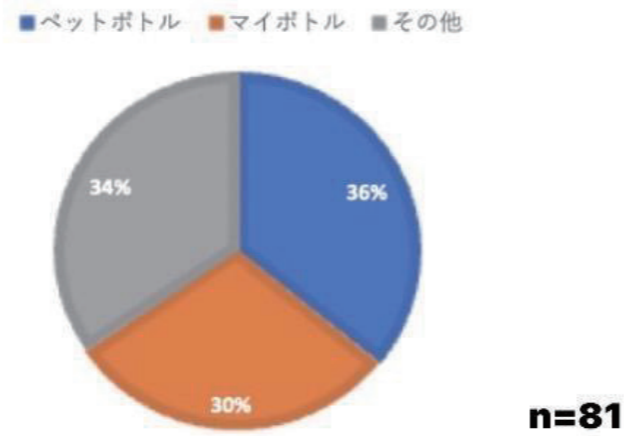


n=18

### 3年生のペットボトル持参数



### 全体の割合



その他：紙パックやリサイクルマークがついていないプラスチック容器など  
※リサイクルマークのない容器包装プラスチックに分類されるものはペットボトルに含まれない

これらのデータの結果から推測されることは大阪府の高校生 272,011 人（通信制高校を除く\*）の3割以上の方がペットボトルを消費しているということです。大阪府の高校生全体でペットボトルの使用数をゼロにすると、1日あたり 81,603 本のペットボトルを削減できるという事になります。

\*全日制の高等学校と専修学校の生徒の数を合わせた人数です。  
(<https://www.pref.osaka.lg.jp/kyoikusomu/handbook/data.html>)

\*通信制の高校では通学日数が少ないこともありデータが正しく反映されないため。

### 5. 学校にしていきたいこと

a. 学校の方々に実際に行っていただきたいことは、学校にドリンクサーバーやウォーターサーバーを設置することです。そうすることで、生徒たちはマイボトルを持ち寄れば、ペットボトルのドリンクを購入しなくても良くなります。

b. 現在、多くの自治体や団体がウォーターサーバーの設置などの政策を積極的に進めています。実際にウォーターサーバーを設置している自治体や団体の例を、以下の通り紹介します。

① 所沢市ではマイボトル専用給水スポット（ウォーターサーバー）があり、マイボトルを持っている人はペットボトルを消費しなくても、ウォーターサーバーより水を補充することができます。



所沢図書館本館



引用：所沢市ホームページ

→目的：ペットボトルなどの使い捨てプラスチック容器の利用を減らし、ゴミの削減や循環型社会の形成に向けた意識を高めるとともに、マイボトルの持ち歩きを推進するものです。そのため、プラスチックコップ、紙コップなどの使い捨て容器は用意していません。

② 京都府亀岡市で市内公共施設など7箇所に給水スポットを新たに整備しています。

→目的：「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」の具現化のため、使い捨てプラスチックの使用削減に向けたマイボトルの普及促進と、市内飲食店などと連携した、マイボトルに無料で「亀岡の美味しい水」が補給できる給水スポットづくり『いつでも、どこでも「亀岡の美味しい水」プロジェクト』に取り組んでいます。





亀岡市役所一階

亀岡市交流会館

引用：[亀岡市ホームページ](#)

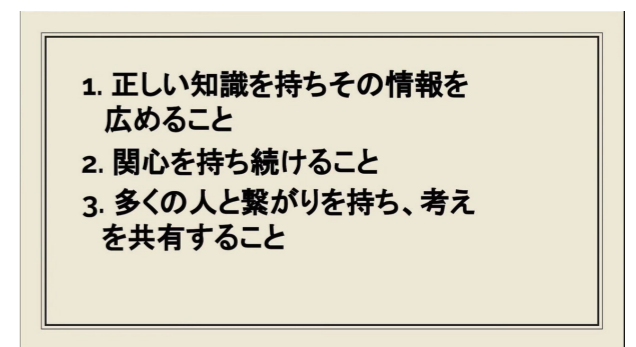
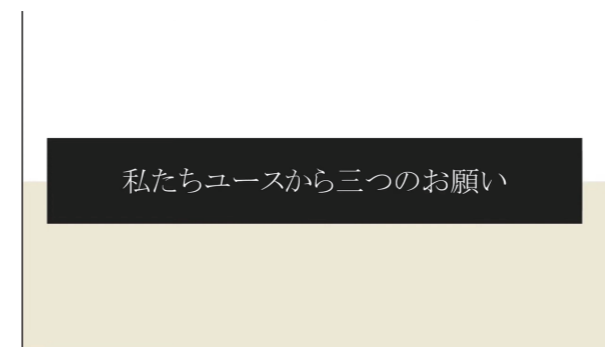
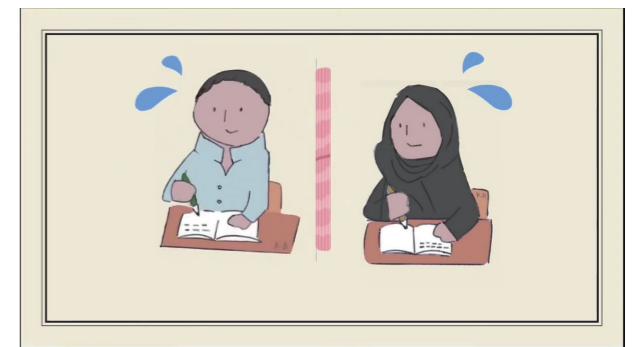
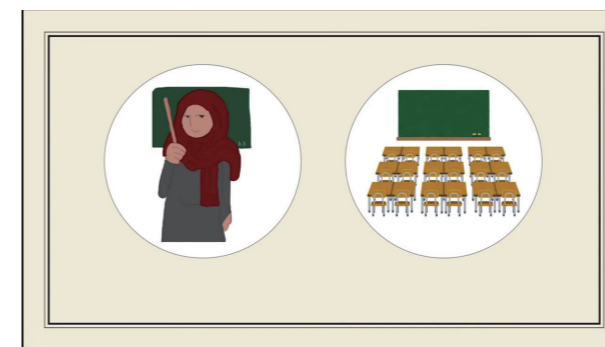
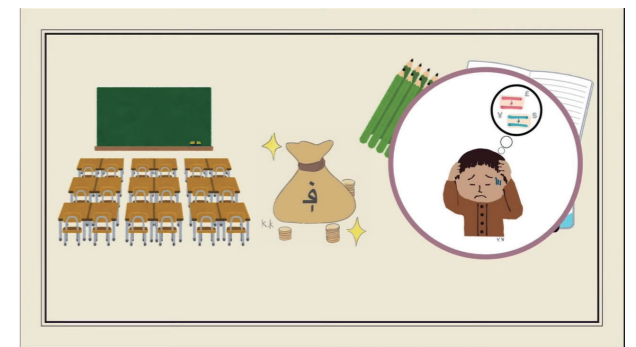
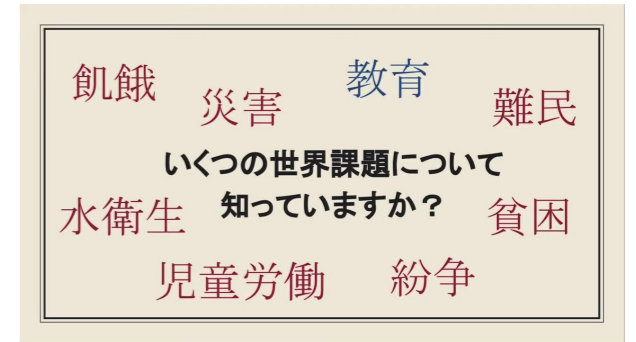
## 6. 提言

私たちがこの提言書で伝えたいことは、学校という大きな組織から変化を起こして欲しいということです。個人の活動だけでは、海洋プラスチック問題の解決には追い付きません。そこで私たちははじめの一歩として、ドリンクサーバーの設置を呼び掛けたいと思っています。ドリンクサーバーの設置をすることによって、マイボトルをも持つというムーブメント（ウォーターサーバー+マイボトルにして、外出先で飲料を新たに買う機会を減らすことが出来れば、ペットボトルごみの削減に貢献できる）につながると考えています。私たちが集計したデータから、大阪府の全日制の高等学校に通う生徒だけで1日で81,603本のペットボトルを削減できると私たちは考えています。リサイクルペットボトルなどのリサイクル製品は、海洋プラスチック問題の解決にはなりません。将来の地球のためにペットボトルの消費を根本的になくすことが、海洋プラスチック問題の直接的な解決に繋がります。ですので、学校という大きな組織から変革を起こしてってください。

## 動画配信 「アフガニスタンの貧困・教育について」



YouTube 動画





## 2022年度 ユース提言セクション

テーマ LGBTQ+ と教育

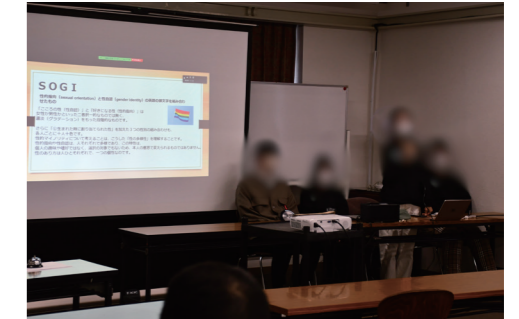
伴走講師

あかたちかこさん  
京都精華大学 非常勤講師

### 始まり・シンポジウム

2022年9月に、ユース提言セクション(以下アドセク)2022が立ち上がりました。アドセク2022が選んだテーマは、「ジェンダー教育」。

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022のシンポジウム「一緒に学校で SOGI や LGBTQ+ について考える機会を作りませんか」では、「当事者ではない自分たちが LGBTQ+ について提言をすること、自分たちの持つ特権性をどう考えるのか」という切り口で、伴走講師のあかたちかこさんとアドセクメンバーとの対談動画(事前に収録したもの)を上映し、参加者の高校生と一緒にこのテーマについての考えを深めました。



### 文部科学省への提言

アドセクメンバーはその後、「未来世代を担う若者が、多様なセクシュアリティが存在することは自然なことだ」という認識を持ち、差別や偏見のない社会を実現するために、学校において LGBTQ+ や SOGI についての教育の機会が必要だ」という考えのもと、教育内容やその実施体制について、文部科学省に向けた提言書を作成しました。



文部科学省との調整に時間を要し、異例の年度を跨いでの活動となりましたが、2023年8月、参議院議員会館にて、国会議員との意見交換会、文部科学省への提言を行うことができました。

当日はまず、今回文科省への直接の提言を実現するのに力を貸して下さった、石川大我議員や秘書の榎本さんらと様々な意見交換を行いました。そしてその後、総合教育政策局政策課企画官の廣田さんをはじめ、文部科学省の皆さんに直接提言書を手交しました。次に文科省の皆さんとの意見交換を始めるにあたり、高校生メンバーのうちのひとりが次のように話してくれました。

この提言書は、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 のユース提言セクションで作成しました。

## 2022年度 ユース提言セクション

私たち高校生実行委員がテーマを決め、専門家の方々ともお話をしながら提言書を作成してきました。そして、12月に行われたワン・ワールド・フェスティバル for Youth のシンポジウムでは、一般参加の高校生たちともテーマを共有し、「提言する」ことの難しさについても考えました。その後、その提言をブラッシュアップして、今日に至っています。

提言の背景には、近年の日本での、LGBTQ+ が正しく認知されておらず、セクシュアリティの重要な考え方である SOGI という言葉も広まっていないという現状、そして性的マイノリティへの偏見・差別や、社会構造による課題が残っているという現状があります。

私たちは、こういった現状が残っている理由の一つには、いわゆる「マジョリティ」である人々が LGBTQ+ や SOGI についてよく知らないために、性的マイノリティの方々を「異質だ」と感じているからではないか、と考えています。そこで、私たちは、多様な性があることを当たり前だと受け入れるようになるためには、まずは知ることから始めるべきだと考えました。しかし、学校での LGBTQ+ などの教育は実施が少ないのが現状です。

私たちは次世代を担う若者が、学生のうちに、多様性を当たり前と感じて受容できる価値観を醸成するために、学校における LGBTQ+ や SOGI についての教育の機会の設置に向けて、3つのことを提言します。

- 1) 「マイノリティの子供だけでなく「周りの子どもや大人」にも働きかけ、ジェンダーやセクシュアリティについての知識や多様性を受容する価値観を教育によって普及させることを目指す」という記述を、4期の教育振興基本計画に不随する計画に入れる。
- 2) 以下の授業・ワークショップ、実施体制の内容を文科省から各教育機関への通知として送る。
- 3) 生徒指導提要に、ジェンダーやセクシュアリティについての教育を実施するという前提で、以下の実施体制の注意点の記述を加える

提言書の全文・具体的な内容は、ぜひ 34 ページからご確認ください。当日、提言セッションのメンバーはそれぞれ、自分の意見や疑問に思っていることを堂々と話してくれました。中には「こういった周知ができるのに対し、私たちの提案のような周知が難しいのはなぜなのでしょう」など、鋭い質問もありました。



そしてそれらに対して、石川議員や秘書の榎本さんも、廣田企画官をはじめとした文科省の皆さんも、メンバーそれぞれの意見や質問に丁寧に応じてくださいました。文科省側からは、すぐに何かを変えるという返答はいただけなかったものの、高校生の言葉はしっかりと受け止めてくださったと思っています。

私たちとしても、提言書を渡して終わりではなく、「提言」のプロセスの一部として引き続き、ウォッチを続けたいと思います。



2023年7月31日(月)  
ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 高校生実行委員会  
ユース提言セッション 作成

## ジェンダー教育に関する提言

### 目次

目次.....	1
前文.....	2
提言.....	3
授業・ワークショップの内容.....	4
1. セクシュアリティ、SOGI について学ぶ.....	4
2. 一人ひとりが自分のセクシュアリティについて考える機会を設ける（ワークショップ）.....	5
3. 社会の現状を知る.....	7
実施体制について.....	10
参考.....	12

## 前文

私たちは、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth という、高校生のための国際協力／SDGs イベントの高校生実行委員会内に設置されているユース提言セクションです。<sup>1</sup>

近年、LGBTQ+という言葉が話題にあがることが増えました。しかし、LGBTQ+の内容が広く認知されているとは言い難く、セクシュアリティの重要な考え方である SOGI という言葉は日本で広まっていません。また、現在でも性的マイノリティの方々への偏見・差別や、社会構造による課題が残っています。例えば、SOGI ハラ、福利厚生の不適用、男女を前提とした制服や校則、同性婚が認められていないことなどが挙げられます。私たちのなかにも、まさに自分が通っていた学校で、性的マイノリティの生徒が同級生に中傷されていたという経験を持つ人もいます。このような、性的マイノリティへの差別・偏見が残る現状に違和感や憤りを覚えたことがきっかけとなり、この提言を作成しました。

しかし、私たちがこれらを問題視するのは、性的マイノリティの方々にとって不平等だからという理由だけではありません。そもそも、“セクシュアリティで人が差別されたり、不利な状況に置かれたりすることはおかしいことである”と私たちは考えます。これは、“人種で人が差別されることがおかしいと考える”ことと、なんら変わりはありません。私たちは、セクシュアリティだけでなく、さまざまな面での多様性を受け入れている社会を理想としています。各々のセクシュアリティに対してどう思うかではなく、そういった人もいることを当然であることを知るための教育や環境が必要だと考えています。あらゆる人びとが根本的に多様性を受け入れるようになることで、現在も存在している性的マイノリティの方々への差別・偏見や、社会的構造の課題が解決され、性的マイノリティの方々が自分の性を隠すこと、萎縮することなく生きることができると考えます。性的マイノリティの方々に限らず、誰もが自分らしく生きることができる社会が、私たちが思い描く理想の社会です。

私たちは、社会構造の中の課題や、性的マイノリティの方々への差別、偏見が残っているのは、いわゆる「マジョリティ」である人々が LGBTQ+ や SOGI についてよく知らないために、性的マイノリティの方々を「異質だ」と感じているからではないか、と考えています。そして多様な性がある当たり前だと受け入れるようになるためには、まずは知ることから始めるべきだと考えています。しかし、現在教育振興基本計画には、性的マイノリティという言葉は1語しかありません。また、宝塚大学教授の日高庸晴氏の調査によると、実際に LGBTQ+ などの性的マイノリティについて教えたことがある教師は 15%に過ぎません。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> <https://owf-youth.com/index.htm>

<sup>2</sup> <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/450141.html>

そこで、私たちは次世代を担う若者に対して、教育の場である学校で、正しい知識と多様性を受け入れる価値観を教える必要があると考えました。学校は、将来社会に出る多くの学生が通う場です。学校で SOGI や LGBTQ+ についての知識や価値観を教えることができれば、将来的に、多様性を受け入れる価値観は普及しやすくなると思います。また、家庭内では親の影響が強いこと、親世代の年代の人には性的マイノリティは異常だという考えを持っている方もいることから、家庭と切り離された学校で教育を進める必要があります。また、若い年齢の人々の価値観は柔軟です。もし LGBTQ+ や SOGI について知らなかったとしても、大きな先入観を持たずに受け入れやすいと考えています。さらに、性的マイノリティの方々が自分のセクシュアリティを自覚するのは学齢期が多いため、学校で自身のセクシュアリティについて正しく認識したり、さまざまなセクシュアリティが存在することを知ったりすることは、性的マイノリティの子どもたちにとっても必要です。

これらを踏まえて、私たちは、学生のうちに多様性を当然だと受け入れる価値観を醸成するために、学校における LGBTQ+ や SOGI についての教育の機会の設置に向け、以下の3つのことを提言します。また、教育の具体的な内容や実施体制についても提言します。

## 提言

1. 「マイノリティの子供だけでなく「周りの子どもや大人」にも働きかけ、ジェンダーやセクシュアリティについての知識や多様性を受容する価値観を教育によって普及させることを目指す」という記述を、4期の教育振興基本計画に付随する計画に入れる。
2. 以下の授業・ワークショップ、実施体制の内容を文科省から各教育機関への通知として送る。
3. 生徒指導提要に、ジェンダーやセクシュアリティについての教育を実施するという前提で、以下の実施体制の注意点の記述を加える。



## 授業・ワークショップの内容

### 1. セクシュアリティ、SOGI について学ぶ

セクシュアリティ(=人間の性)：

セクシュアリティは生涯を通じて人間であることの中心的側面をなし、セックス（生物学的性別）、性自認とジェンダー役割、性的指向、エロティシズム、快楽、親密さ、生殖がそこに含まれる。セクシュアリティは、思考、想像、欲望、信念、態度、価値観、行動、実践、役割、および関係性を通じて経験され、表現されるものである（WHO 2000）<sup>3</sup>

私たちの説明案（授業・ワークショップのために、より分かりやすくしたもの）

セクシュアリティは、死ぬまでの一生を通して人間であることを中心であり、生まれたときの体の性別、自分が考える自分の性別、好きになる相手の性別などを含んでいる。

これは色々な考え方や想像や欲望や信じていること、態度、ものの見方、行動、取り組み、役割など、色々なものを経験することで表せるものである。

セクシュアリティには、一般的に4つの要素があると言われている。

#### ①「生まれた時に割り当てられた性」

からだの性別の特徴から戸籍に登録された性。「身体的性」とも呼ばれる。

#### ②「自分でとらえている性」

自分で認識している性。「性自認」とも呼ばれる。

#### ③「好きになる相手の性」

自分が好きになる性。「性的指向」とも呼ばれる。

#### ④「表現したい性」

どのような性別を表現したいか。

またセクシュアリティとして有名なのが、「LGBTQ」である。

**Lesbian:**レズビアン(女性の同性愛者)

**Gay:**ゲイ(男性の同性愛者)

<sup>3</sup> 風間孝・他（2018）『教養のためのセクシュアリティ・スタディーズ』法律文化社

**Bisexual:**バイセクシュアル(両性愛者)

**Transgender:**トランスジェンダー(自己の身体の性別と自認する性別に違和感のある人)

**Questioning(Queer):**クエスチョニング(クィア)(自身の性自認・性指向が決まっていない人)

SOGI (ソジ)：

Sexual Orientation (性的指向) と Gender Identity (性自認)。

少数派も多数派も含めたすべての人が持つ性的指向・性自認を表す言葉。

性的マイノリティ等の問題を特定の人々にのみ配慮が必要な課題として捉えるのではなく、少数派も多数派もすべての人が対等・平等、人権の尊重に根ざした課題として捉えるべきであるという、国際的潮流に則った大きな考え方。<sup>45</sup>

### 2. 一人ひとりが自分のセクシュアリティについて考える機会を設ける（ワークショップ）

自らのセクシュアリティを考える時には、まず、世の中には多様な性があるということを知ることが大切である。一人ひとりのセクシュアリティは異なっており、セクシュアリティの決定権は自己が持っているものである。そのため、個人のセクシュアリティを当人以外がラベリング (LGBTQ などの枠に沿ってラベルをつける考え方) してはいけないということにも注意が必要である。

セクシュアリティは四つの要素（指標）の中で、グラデーションで存在している。

マジョリティ、マイノリティで区別するのではなく、個々のセクシュアリティが対等な関係で、互いに尊重される環境にあるべきだという考え方が重要だ。

※用語解説

マジョリティ：多数派、マイノリティ：少数派

<sup>4</sup> <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/33/>

<sup>5</sup> <https://www.jtuc-rengo.or.jp/activity/gender/lgbtsogi/>



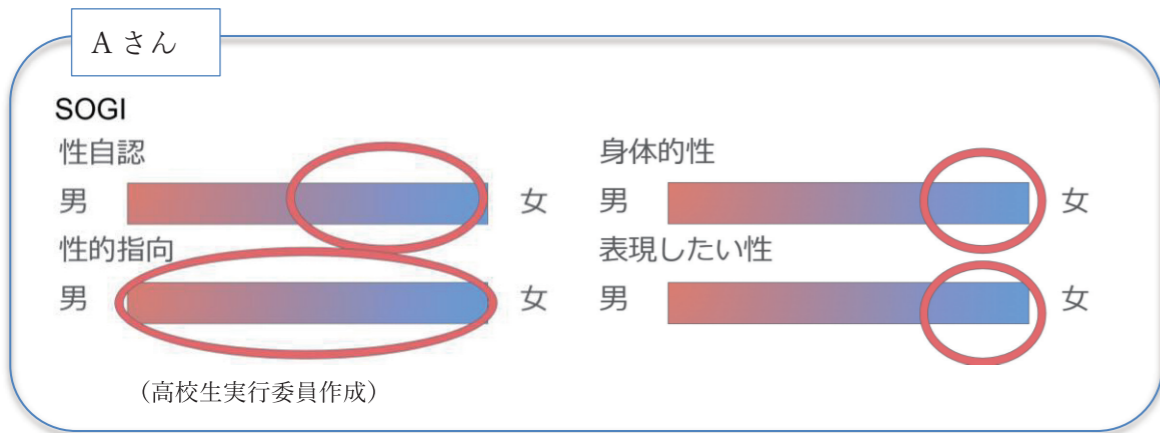
ワークショップの目的

- ・世の中には多様なセクシュアリティがあることを知ってもらうこと。
- ・セクシュアリティをマイノリティ、マジョリティと区切って考えるのではなく、「それぞれのセクシュアリティは異なっており、互いに対等である」ということに気づいてもらうこと。
- ・自らのセクシュアリティについて、例としてあげる人のセクシュアリティと比べながら考えることで、それぞれが異なっており、それが当たり前だという感覚を身につけてもらうこと。

ワークショップ案

①

「Aさんの性自認は女性とどちらでもない性のあいだで変わります。性的指向は全ての性に向いていて、身体的性は女性、表現したい性は女性です。」



「Bさんの性自認は男性、女性のどちらでもなく、性的指向は男性にむいています。身体的性は男性で、表現したい性はすべての性です。」



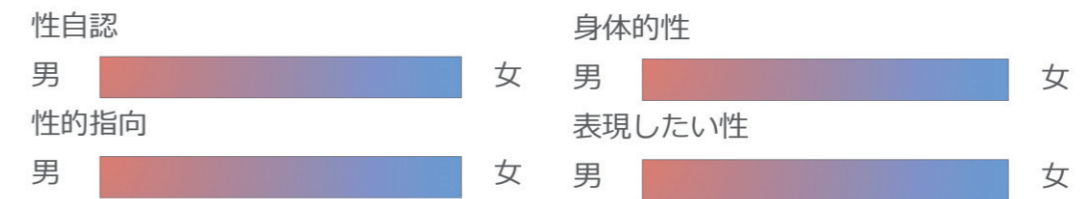
このように、セクシュアリティの具体的な例を複数挙げる。

②

Aさん、Bさんなどのセクシュアリティの例をふまえて、自分のセクシュアリティについて考える、自分と向き合うワークをする。

「あなたの性自認、性的指向、身体的性、表現したい性はどのようになっていると思いますか?」と生徒に問いかけ、丸を書き込んでもらう。

SOGI



(高校生実行委員作成)

参考：平成 28 年度厚生労働化学研究補助金エイズ対策政策研究事業 研究代表者 日高 庸晴氏(宝塚大学 看護学部)

3. 社会の現状を知る

日本社会がどのような課題を抱え、どのように変化しようとしているかについて知ってもらい、考えてもらう。

社会の構造的課題

以下に、課題の例を挙げた。

法律

- ・同性婚は日本では認められていないが、世界では 33 国が同性婚を認めている。<sup>6</sup>

学校

<sup>6</sup> 世界の同性婚 | EMA 日本 (emajapan.org)

- ・女性用、男性用のトイレしか設置されていない。
- ・宿泊行事での部屋割りや入浴の区分けが男女のみである。
- ・校則が男女で区別されており、制服も女子用と男子用のみである。

#### 職場

- ・家族手当、結婚休暇、育児休暇などの福利厚生が男女夫婦にのみ適用される。
- ・男性女性、異性愛者を前提とした就活
- ・Sexual orientation and gender identity（性的指向及び性自認）についてのハラスメント、いわゆる SOGI ハラ。

#### SOGI ハラ：

「好きになる人の性別（性的指向：Sexual Orientation）や自分がどの性別かという認識（性自認：Gender Identity）に関連して、差別的な言動や嘲笑、いじめや暴力などの精神的・肉体的な嫌がらせを受けること。また、望まない性別での学校生活・職場での強制異動、採用拒否や解雇など、差別を受けて社会生活上の不利益を被ること。それらの悲惨なハラスメント・出来事全般を表す言葉。<sup>7</sup>

SOGI ハラの具体例を紹介する。

#### 1. 差別的な言動や嘲笑、差別的な呼称

「ホモって気持ち悪い」「レズなんて死ねばいい」「オトコオンナって変だよ」といった、その人の性を馬鹿にしたり否定したりする発言をすること。

#### 2. いじめ・暴力・無視

「俺らもゲイだと思われたらキモくね？無視しようぜ、無視！」といったように、人の性を馬鹿にしたり否定したりし、さらには物理的な暴力や精神的にダメージを与えるような行動や発言をすること。

（※尚、いじめとは基本的に、加害者の意思には関係なく、被害者本人の感じ方がどうであるかで判別される。個人によるものか集団によるものかどうかはいじめかどうかを判断するのに関係ない。）

<sup>7</sup> <http://sogihara.com/>

#### 3. 望まない性別での生活の強要

「戸籍は女性なんだから、セーラー服で登校しなさい」といったような、その人の性自認を否定し、異なる性を強要する発言をすること。

#### 4. 不当な異動や解雇、不当な入学拒否や転校強制

「男なのにこのまま化粧して入社するなら、異動だぞ。」といったような、著しく不合理な発言及びその事務的処理等をすること。

#### 5. 誰かの SOGI について許可なく公表すること（アウトティング）

「あの子、レズって知ってた？」といったように、他人の性を本人の許可なく他人に公表するなどの行為をすること。

#### 社会の取り組み

##### 法律

- ・パートナーシップ制度は自治体で広がりを見せており、日本では少なくとも 259 の自治体で認められている。<sup>8</sup>ただし、法律婚と同等の法律上の効果は得られない。

##### 学校

- ・性転換が学生証に反映される学校もある。
- ・制服がすべて統一されたデザインになったり、誰でも全ての種類から選ぶことができるようになったりした学校もある。

##### 職場

- ・異性同士の法律婚以外にも福利制度を適用する企業もある。
- ・パワハラ防止法が改正され、企業に SOGI ハラも含めたパワハラ対策を義務付けた。

<sup>8</sup> [日本のパートナーシップ制度 | 結婚の自由をすべての人に - Marriage for All Japan](#)

## 実施体制について

この授業、ワークショップ内容を実施するにあたって、以下は必須項目となる。

1. 生徒も教員も講師も性差別や固定観念に基づいた発言はしない。
  - ・「女性らしさ」「男性らしさ」に関する発言はしない。また、父親や母親がいることを前提に話を進めたりしない。（「保護者」という言葉に変換するなど）
  - ・生物学的に男性と女性という二つの性別に分けなければならない状況もあるということの説明は必要であるが、社会的な性であるジェンダーの話をする中で男性と女性の二つの性を前提としない。
  - ・授業の内容や講師（教員）、生徒の発言の言い回しによってはワークショップに参加している人たちの中で傷ついてしまう人がいるため、大きな配慮が必要である。
2. ワークショップは学校の教員ではなく、外部の人に行ってもらおう。学校の教員はサポートにまわることが望ましい。
  - ・教員と生徒には権力関係があり、それがこの授業、ワークショップに反映される可能性がある。生徒に圧力をかけて意見を述べさせたり、高圧的な態度をとったりする（無意識のうちも含む）ことがないように、外部のLGBTQ+やSOGIの専門家が実施することが望ましい。
3. 教員はワークショップ実施の前に研修に参加する。
  - ・教員の知識不足は、生徒の間違った認識や差別的な感情をうむ可能性がある。また、生徒を傷つける可能性があるため、授業のサポートをする際には事前に研修に参加することが必要である。
4. 教員は参加生徒の意見を否定しない。
  - ・前述したとおり、教員と生徒の間には権力関係がある。生徒が意見を否定されて傷ついたり、自由に意見を述べられなくなったりすること避けるため、教員は生徒の意見を否定しないことが必要である。ただし、誰かを差別するような発言は禁止するこ

とが最重要である。差別発言が行われた場合は、咄嗟の自己制止、その発言を受けた者の対応(フォロー)をどうするのかを必ず考えておくこと。

5. 生徒の意見や考えに対して、評価をしない。成績に含まない。
  - ・「この考え方のほうが素晴らしい」というように生徒の意見に優劣をつけることは生徒が自由に考えることを阻害する。また、その意見が誰かを傷つけるものでなければ、この授業内では意見の優劣はなく、それは他人が決めることでもない。
6. 生徒の参加は任意によるもので、強制されてはならない。
  - ・セクシュアリティはプライベートなものであり、パブリックな場である授業やワークショップに強制的に参加させることは生徒に圧力や不安を感じさせることに繋がるため、生徒の参加は強制されてはならない。
7. 自分のセクシュアリティの表出を強制させてはならない
  - ・生徒自身のもつセクシュアリティを、生徒自身の意志に関係なく強制的に発表させたり、発表せざるを得ない状況をつくったりしない。このワークショップは、生徒同士の発表や自身のセクシュアリティの共有の場ではないということを教員はもちろん、生徒も認識をしなければならない。言いたくないことは言わなくてもよいという環境をつくる。また、他人のセクシュアリティについて本人の意志に関係なく勝手に公言するような行為は絶対にあってはならない。

参考 [Relationships and sex education \(RSE\) and health education - GOV.UK](https://gov.uk)

参考にできる教材

『Ally Teacher's Tool Kit』

<https://rebitlgbt.org/project/kyozai/teacher/>



## 参考

- [1] [ワンフェスユース | ワン・ワールド・フェスティバル for Youth～私たちが描く持続可能な社会の未来図～ \(owf-youth.com\)](#)
- [2] 『日本放送協会 (2021) 』
- [3] 風間隆・他 (2018) .『教養のためのセクシュアリティ・スタディーズ』.法律文化社
- [4] [SOGI ハラスメントとは 具体例や遭遇したときの対応 - 記事 | NHK ハートネット](#)
- [5] [連合 | 「LGBT」「SOGI \(性的指向・性自認\)」ってなに? \(jtuc-rengo.or.jp\)](#)
- [6] [世界の同性婚 | EMA 日本 \(emajapan.org\)](#)
- [7] [なくそう! SOGI ハラ \(sogihara.com\)](#)
- [8] [日本のパートナーシップ制度 | 結婚の自由をすべての人に - Marriage for All Japan -](#)
- [9] [Relationships and sex education \(RSE\) and health education - GOV.UK](#)
- [10] [教職員研修版「Ally Teacher's Tool Kit」 | 認定 NPO 法人 ReBit \(rebitlgbt.org\)](#)

以上

---

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 高校生実行委員会 ユース提言セッション

この活動は、2022 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて実施しました。

Copyright © 2023 One World Festival for Youth 2022 High School Student Executive Committee. All rights reserved.

2023年度  
ユース提言チーム

## 2023年度 ユース提言チーム

テーマ 若者の政治参加

### 伴走講師

林大介さん  
模擬選挙推進ネットワーク事務局長、  
浦和大学社会学部准教授

### 始まり

2023年8月に立ち上がった、ユース提言チーム2023。2023年度の高校生メンバーが各自の関心事項を出し合い、それをもとに話し合って選んだテーマは、「若者の政治参加」でした。そこから高校生メンバーでDVD「ゼロから始める主権者教育 18歳の選挙権」（特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC））を見て、模擬選挙に焦点を当てることに。模擬選挙推進ネットワーク代表／事務局長の林大介さんに伴走講師を依頼し、模擬選挙に限らない幅広い助言をいただきながら、活動を進めてきました。

特に「若者の政治参加の度合いや投票率を上げるための手段として、模擬選挙はすべてではない。つまり、模擬選挙をやったからといって、投票率が上がるとは限らない」という助言を聞き、「自分たちは何を目指し、そのためにどのように模擬選挙を活用したいのか？」という問いに何度も向き合い、話し合いを続けました。

### シンポジウム

2023年12月17日（日）に開催されたワン・ワールド・フェスティバル for Youth2023では、シンポジウム「若者の主権者意識を向上させるには？？」を実施しました。伴走講師の林大介さんに講演いただき、その後ユース提言チームが準備してきた、模擬選挙に準ずるワークショップを行いました。

ワークショップではチームメンバー自らが立候補者となり、選挙演説をし、参加者はそれを踏まえて話し合いをしながら投票先を検討し、最終的には投票、結果発表までを行いました。

4名の立候補者の選挙ポスターの内容をご紹介します。

#### ①「より良い未来のために」

防衛費増額／高校教育の一律無償化／児童相談など学習環境の改善

#### ②「残そう平和な日本」

減税！／防衛費削減！／環境保全！

#### ③「日本の経済を盛り上げる」

円安改善／防衛費維持



#### ④「ジェンダーギャップをなくす！」

議会における女性の割合を高める／子育て支援、育休促進／ワークライフインテグレーション／増税

参加者の方からは、「色々な人の選挙に関する考えを知れた」、「楽しく考えることができた」という感想が聞かれました。

またユース提言チームメンバーからは、「意外とたくさんの方が積極的に参加してくれて驚いたし嬉しかった」、「準備したことを真剣に聞いてくれた人たちがいて、思いが伝わった気がして達成感があった」という感想が述べられました。

### 提言書

その後、ユース提言チームメンバーは、学校に向けた提言書を完成させました。提言書には、シンポジウムでのワークショップの様子も参考情報として記載されています。49ページから、その内容をぜひご確認ください。そして2024年2月現在、学校に実際に提言を行うべく、引き続き調整を試みているところです。

また、ユース提言チームメンバーは、提言後の「ウォッチ」を自分たちで行うためにこのチームでの活動を継続することを検討したものの、事務局のサポートから外れた自主的な活動となり活動自体が難しいこと、それぞれの高校生活もしくは大学生活を考えて継続して携わっていくことが難しいということから、それを断念するという結論に至りました。

この活動は年度で一区切りとなりますが、「今後の活動を続ける意義や重要性についてはメンバー全員理解している」として、ユース提言チームとして次のような言葉を残してくれています。

「提言チーム一同今回の活動を通して提言活動の難しさや知らないメンバーと連携をとっていく難しさを感じるとともにひとつのものを作り上げていく達成感も感じました。この経験をこれからの生活に活かしていければと思っています。」

# 「若者の主権者意識を高めたい！」



わたしたちが描く持続可能な社会の未来🌱

- 前文 ..... 3
- 提言 ..... 5
  - 提言内容 ..... 5
  - 問題点 ..... 5
  - 目的 ..... 5
  - 授業の進め方 ..... 5
  - 実施体制 ..... 6
  - 参考にした活動  
（[8][9][10][11]の情報を元にスウェーデンの「学校選挙」と日本とを比較） ..... 7
- ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth2023におけるワークショップの内容 ..... 9
  - プログラム内容 ..... 9
  - 参加された方の感想 ..... 9
  - 実行委員の感想 ..... 10
- 参考文献 ..... 11

提言書作成：ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth2023 ユース提言チーム



## 前文

私たちは、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth という、高校生のための国際協力/SDGs/多文化共生イベントの高校生実行委員会内に設置されているユース提言チームです。

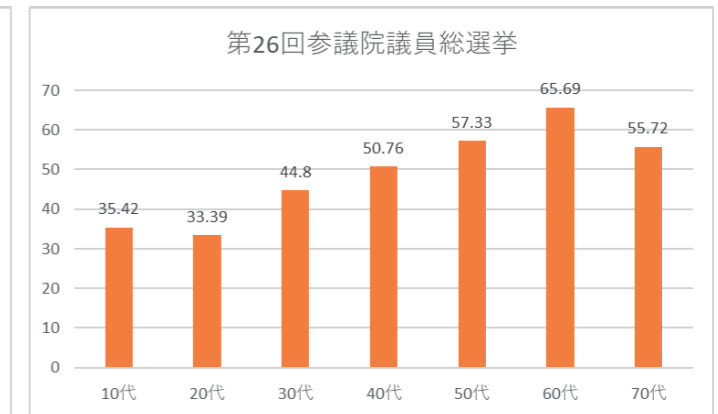
社会を変え時代を創っていくのは、ユースの使命です。社会をより良くしたい、社会に貢献していきたいと思っている若者は多くいます。しかし、現代社会に若者の声は適切に届いているのでしょうか。

日本財団の「18歳意識調査」[1]では、17歳から19歳の若者と社会との関わりについてのアンケートを日本を含め6カ国にとっています。その2022年の結果によると、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と答えた人の割合が日本は26.9%で、6カ国の中で1番低い結果でした。1番高かった国はインドで78.9%、2番目に低いイギリスでも50.6%と半数を越える結果になりました。さらに新型コロナウイルスパンデミック後の調査では、同内容に「より同意するようになった」と回答した人の割合が日本は12.7%まで減少しました。

このアンケートは日本のものであるため、海外のデータは、社会情勢に対して意識の高い若者がアンケートの存在に気づき答えた可能性があります。また、人数も1000人と限られているため正確なデータであるとは断言できません。それでも、日常生活を送る中での私たち自身の肌感覚として、「自分が国や社会を変えられる」と思っている人は少ないように感じます。

若者の、社会や国を変えることへの意識の低さは、実際の選挙における投票率にも表れています。

2021年10月に行われた第49回衆議院議員総選挙において、10代の投票率は、43.21%、20歳代が36.50%、30歳代が47.12%、40歳代が55.56%、50歳代が57.33%、60歳代が65.69%、70歳以上が55.72%でした。2022年7月に行われた第26回参議院議員通常選挙においては、10代の投票率は35.42%、20歳代が33.39%、30歳代が44.80%、40歳代が50.76%、50歳代が57.33%、60歳代が65.69%、70歳以上が55.72%でした。



いずれの選挙でも他の年代と比べて、若年層の投票率は低い水準にとどまっています。2017年の第48回衆議院議員総選挙における調査によれば、棄権理由として、「選挙に関心なかったから」、「私ひとりが投票しなくても変わらないから」、「政治のことが分からないものは投票しないほうがいいから」、というものがあげられました[2]。政治への関心の薄さ、自分に関係ないという当事者意識の低さが投票率を下げたしまい、若者の声が届かない社会に繋がっています。

私たちは、この現状について、自分の意見で何かを変えたという成功体験の少なさが原因であると考えました。だからこそ、若いうちから継続的に、校則や地域の問題など身近な問題について意見を表明する場を設け、自分の意見が聞き入れられたという体験を積む必要があります。

これらを踏まえて、若者の政治参加への意識向上のために、学校における主権者教育の活性化に向け、以下のことを提言します。

## 提言

### 提言内容

1. 若者の主権者意識を向上させることや政治参加を促すことを目指し、高等学校の「教育・文化週間」として政治参加週間を設け、社会科の授業の中に模擬選挙を組み込む。(1、2年次は年に1度以上の実施、3年次は選択科目ごとの各自参加を推奨。)
2. 以下の授業の進め方、実施体制の内容を、参加を希望した高等学校の教員に配布する。

### 問題点

若者の投票率が低いことによる影響として、近視眼的な政策が実現されやすくなるということがある。特に現代日本はシルバーデモクラシーと称されており、高齢者を優先した年金や福祉、医療への支出が大きな割合を占めている。その結果、日本では直近の社会課題の対策しかできない後追いの政治が行われ、気候変動や少子高齢化といった長期の問題に対応できていない。これを受けて国は投票年齢の引き下げを行ったが、あまり効果は見られない。

若者の政治参加を推進していくためには今の選挙教育は不十分であることがうかがえる。

### 目的

1. 実際の政党、候補者に対して模擬的に投票をすることで、高校生のうちから政治に参加したという実感と経験を積んでもらうこと。
2. 模擬選挙を通して社会や政治についての自分の考えを話し合うことで、主権者意識を高めること。

### 授業の進め方

1. 各政党の公約を調べる・ディスカッションの準備

「各政党(もしくは政治家)の学生を対象とした政策」「各政党(もしくは政治家)の、ユース世代に関わる政策」をテーマに、各政党のホームページに掲載されている公約を調べ、理想としている社会と公約を照らし合わせる。

※各政党とは模擬選挙実施時に総務省に登録されている政党とする。[https://www.soumu.go.jp/senkyo/seiji\\_s/naruhodo04.html](https://www.soumu.go.jp/senkyo/seiji_s/naruhodo04.html)

2. 生徒間での情報共有・意見交換

ディスカッションのテーマを「理想の社会と現実とのギャップ」、「各政党／政治家の掲げる政策の良いと思うところ、悪いと思うところ」とし、4～5人のグループを作り調べた情報をもとに意見交換をする。

※1、2の調査、意見交換の際は実施体制を参考に行う。

3. 投票

実際の選挙と同じように秘密投票を行う。

投票はウェブ上(Googleフォーム等)で行い、その集計結果を授業内で発表する。

### 実施体制

政治参加参加週間および授業を実施するにあたって、以下の項目に注意する。

1. 各政党について調べる際は、自分が特に重要視している観点(教育、経済など)をもとに調べるようにすることを推奨する。意見交換の際に根拠のある発言ができるようになる。
2. 生徒の意見や考えに対して評価をしない。また、この授業での過程や結果は成績に含めない。
  - ・他者の考えを否定する意見を除き、意見に優劣は存在しない。また、話し合いでの積極性(発言数など)も評価に含めないこととする。

### 3. 秘密選挙を厳守する。

・投票をする際には、必ず話し合いを終了し、各自が1人になれる時間を用意したことを確認した後に投票を実施する。

### 4. ある政党に偏った発言は控える。

・生徒、教員ともに特定の政党および政治家を支持する、中傷する発言を控える。  
・政党および政治家に対する意見は、調べた情報に基づいて述べる。憶測や偏見など偏った意見は控える。

### 5. 授業の参加者は他の意見を否定してはならない。

・話し合いの場において他の意見を否定することは、否定された生徒および周りの生徒の政治へのハードルを上げ、自由な考えを妨げる可能性がある。少数意見であっても、全ての意見は尊重されることが必要である。たとえ自分とは違う意見が挙がったとしても、「否定」ではなく根拠のある「反対」を、話し合いの場にいる全ての生徒、教員が心がける。

### 6. 意見の強制はされてはならない。

・「あの子がああ言っているから」と同調圧力で票を集めることはあってはならない。項目5で前述した通り、強制された「賛成」ではなく「肯定」を心がける。

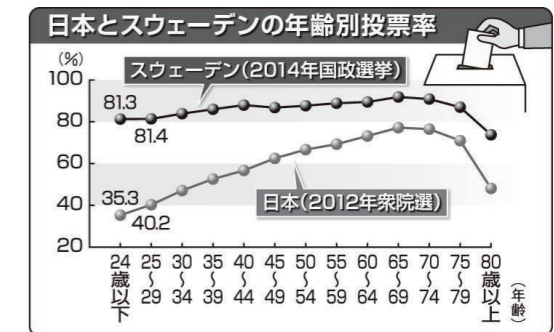
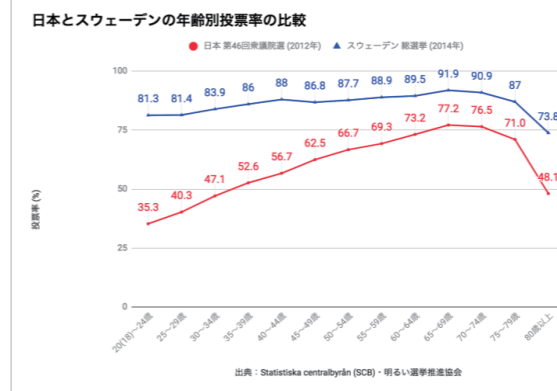
## 参考にした活動

〔8〕〔9〕〔10〕〔11〕の情報を元にスウェーデンの「学校選挙」と日本とを比較

若者の投票率80%超のスウェーデンが行うskolval(学校選挙)とは、中学校(基礎学校の高等部)と高校で行っている模擬選挙。投票先は本物の選挙と同じ(国政政党)であり、結果公表は本物の選挙の投開票日の翌日に公表される。学校選挙への参加は、任意の参加で、学校単位で参加する(運営は任意の生徒グループ)およそ全国の中学・高校の50%が参加する。投票率は80%程度となっている。選挙前には、地域の選挙小屋(各政党が小屋を設置し、有権者と対話する)を訪れたり、政治家やユース党が学校を訪れ、討論会や意見交換を行う。政治家やユース党が学校に行くことを政府は積極的に推奨している。それぞれの学校で活動しているため、参加費は一切かからない。大きな違いは、ここでの投票は実際の投票には換算されないことだ。

一方若者の投票率が35%ほどの日本が行う模擬選挙とは...各学校の先生の判断の下、授業で取り扱う。そのため、模擬投票の機会が著しく少ない。また、学校の教育では「政治的中立性」を求められているため教え方が難しく躊躇してしまっていることが多い。

文部科学省が令和元年度に行った調査では、「主権者教育を行った」と解答した学校が全体の9割以上との結果が出ている一方で、「現実的な政治的事象についての話し合い活動(平成27年通知)を実施した」と解答した学校は3割強に留まっている。また、指導にあたり選挙管理委員会や地方公共団体、NPOなどとの連携についても5割弱が「連携していない」と解答。そのほか、子どもたちが多面的かつ多角的に政治的事象や現実社会の課題について考察を深めるために、情報の収集・解釈のスキルや公正な判断力といったメディアリテラシーを育成しなければならない課題も残っている。



左グラフ出典: Statistiska centralbyran(SCB)・明るい選挙推進協会

右グラフ出典: 公明党 <https://www.komei.or.jp/komeinews/p20360/>



## ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth2023におけるワークショップの内容

ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth2023(2023年12月17日開催)において、若者の主権者意識を高める取り組みとして高校生政治家による模擬選挙を行いました。ワークショップには講師として未成年模擬選挙推進ネットワーク代表の林大介さんにお越しいただきました。

### プログラム内容

#### ①林大介さんの講演

林大介さんに模擬選挙、主権者教育についての講演をしていただきました。当日参加された人も模擬選挙の目的について知ることができました。

#### ②高校生政治家の公約アピール

高校生実行委員が政治家を模してそれぞれの選挙公約を発表しました。

1人目:「日本を強く」①増税②防衛費増③高校教育費一律無償化

2人目:「残そう平和な日本」①減税②防衛費減額③環境保全

3人目:「日本の経済を盛り上げる」①防衛費維持 ②円安改善

4人目:「ジェンダーギャップをなくそう」①増税②クォータ制(議会における女性の割合を増やす)③子育て支援④育児休暇促進政策

#### ③参加者によるディスカッション

高校生政治家による公約を踏まえて、参加者同士が参加者同士が4~5人でグループを作り、「理想の社会像は？理想と現実のギャップは？」、「各政治家を選んだ場合のメリット・デメリットは？」の2つのテーマについてディスカッションをしました。

#### ④投票・開票

今回のワークショップでは、Googleフォームを用いてその場で投票と開票をしました。結果、今回は4人目:「ジェンダーギャップをなくそう」①増税②クォータ制(議会における女性の割合を増やす)③子育て支援④育児休暇促進政策 が当選しました。

### 参加された方の感想

参加された方の感想の中には「政治について考えるきっかけになった。」「勉強になった。」「会場の皆さんと意見を共有する時間があって課題に対する意識を持つことができた。」といった、主権者意識が高まったという声があった他、「私は今18歳で今年から選挙権を持つようになりましたが、実際選挙と言われるとあまりにも広義なものに感じてしまい選挙権を持つものとしての意識がほとんどありませんでした。しかし本日のお話・ディスカッションを通して日常的に社会問題について考える必要があるのだなと痛感しました。」というように自分の生活に照らし合わせて考えてくださった方もいました。

また、模擬選挙に対しては「参加者が実際に考えて、グループで話し合うことができた。」「高校生が、選挙についてこれだけ真剣に考えて企画できることはほんとにすごいことだと思います。」という賛同の声とともに、「時間があまりなかった。」という意見もありました。

### 実行委員の感想

実行委員として運営側で参加してみて、参加者全員が何かしら社会に対して思うことがあること、普段の生活では話しづらいことも模擬選挙という場を設けることで意見を出しやすくなっていたことを感じました。企画段階では初対面の人同士が集まって政治や社会についていきなり話し合えるのかという心配がありました。しかし、今回のワークショップでは話し足りないという声が出るほど、どのグループも盛り上がっていました。若者の政治離れが問題視されていますが、模擬選挙など、自分が社会に対して思うことを正直に話し合える場を設けていくことが主権者意識の向上につながると感じました。

## 参考文献

- [1]日本財団(2022年3月24日)「18歳意識調査」第46回「国や社会に対する意識(6カ国調査)」報告書 [https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new\\_pr\\_20220323\\_03.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new_pr_20220323_03.pdf) (最終閲覧日 2023年12月3日)
- [2]総務省選挙部(2022年3月)「目で見る投票率」 [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000696014.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000696014.pdf) (最終閲覧日 2023年12月3日)
- [3]東京都選挙管理委員会事務局「選挙出前授業・模擬選挙」 <https://www.senkyo.metro.tokyo.lg.jp/vote/mogi/> (最終閲覧日 2023年12月3日)
- [4]原口和徳(2016年4月16日)「海外では当たり前前の模擬選挙。遅れをとった日本と海外の模擬選挙事情の違い」選挙ドットコム <https://go2senkyo.com/articles/2016/04/16/16627.html> (最終閲覧日 2024年1月14日)
- [5]室橋祐貴(2022年9月29日)「学校選挙、子ども・若者団体に年間約45億円の助成金を出すスウェーデン若者・市民社会庁の取り組み」YAHOO!JAPANニュース <https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/e48cbb083133b88ba5b1b91b13fb15b16a03be88> (最終閲覧日 1月14日)
- [6]学校総選挙プロジェクト <https://youthvote.tsite.jp> (最終閲覧日 2024年1月13日)
- [7]両角達平(2019年7月24日)「スウェーデンの若者の選挙の投票率が高い理由がわかる12記事」Tatsumaru Times <https://tatsumarutimes.com/archives/2726> (最終閲覧日 2024年1月13日)
- [8]若者の投票率80%超のスウェーデンが行う模擬選挙とは？(前編)「国や学校がサポートし、生徒が主導で行う「学校選挙」」 <https://eduwell.jp/article/sweden-youth-vote-turnout-high-school-mock-election-part1/> (最終閲覧日 2024年1月30日)
- [9]日本教育新聞(2021年2月24日)「主権者教育の推進はなぜ必要か。解決すべき課題とは」 <https://www.kyoiku-press.com/post-227223/> (最終閲覧日 2024年1月14日)
- [10]文部科学省「第8条 政治教育」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/004/a004\\_08.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/004/a004_08.htm) (最終閲覧日 2024年2月1日)
- [11]文部科学省「主権者教育(政治的教養の教育)に関する実施状況調査の結果について」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2020/mext\\_00171.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/mext_00171.html) (最終閲覧日 2024年2月1日)

この活動は、2023年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて実施しました。

Copyright © 2024 One World Festival for Youth 2023 High School Student Executive Committee. All rights reserved.

## 第二部 皆さまからの寄稿



ユース提言セクション 2021 伴走講師

**中道 貞子**

奈良国立大学機構国際戦略センター運営委員会 (NaraISC) 奈良女子大学 客員部会員

**ワンフェスユース開催までの経緯**

2021年11月21日、中道宛に一通のメールが届きました。そこには「私たちはワン・ワールド・フェスティバル for Youth (以下ワンフェスユース) という高校生対象のSDGsを推進するためのイベントの運営に高校生実行委員会として参画しています。本日、中道様にはワンフェスユース当日にアフガニスタンの教育をテーマにお話ししていただくと共に、提言策定プロセスにおいてのアドバイスをお願いをしたく、ご連絡させていただきました。」と認められていました。ウェブサイトで検索をし、メールアドレスを探して連絡をくださったのでしょうか。12月19日(日)に開催する「ワンフェスユース」についての説明、私に依頼したい内容について、しっかりと説明がなされていました。

私がアフガンに関わり始めたのは2002年。当時、私は奈良女子大学附属中等教育学校の副校長でした。奈良女子大学を含む5女子大学がアフガンの女性教育者支援のためのプロジェクトを立ち上げ、私もそのメンバーに加わったことが始まりです。その後、バーミヤンに魅せられ、バーミヤンにある学校の校舎建設支援をして以来、その学校を訪問し続けていました。2009年には初めて9年生(中3)までの学業を終えた女子生徒も出て、少しずつ教育が充実していくのを嬉しく思っていました。しかし、2021年8月にタリバーン政権が復活し、中学生以上の女子生徒や女子大生が登校禁止になるなど、アフガンの状況は厳しくなっていました。



最後の訪問 (2017年6月)



休憩時間の子ども達 (2009年6月)

そんな時期に、高校生の皆さんがアフガンに関心をもってくださったことをとても嬉しく思い、申し出を受けました。メールのやり取り、オンラインでの打ち合わせなどを実施。発表用スライドの内容、提言先などについてのやり取りでお互いの理解が深まっていったと思います。

**ワンフェスユース当日のこと**

開催日から2年余りが経ち、記憶があいまいになっている部分もありますが、当日のことを振り返ってみます。高校生の皆さんからは、「アフガニスタンとはどんな国?」「アフガニスタンの教育」という内容で発表がありました。世界が抱えるいろいろな課題の中で教育に注目し、アフガンを例に、子どもたちが学校に行けない理由について考察されていました。主要民族パシュトゥーン人の男性の考え方、貧しいために文房具が買えなかったり交通費がなかったりすること、特に女子生徒は、女性教員が少なかったり治安の問題があること、家事手伝いを優先しなければならないことなどについて紹介されました。

最後には、「正しい知識を持ち、その情報を広めること」「関心を持ち続けること」「多くの人と繋がりを持ち、考えを共有すること」という3つのお願い(提言)が提示されました。

私の方からは、「私がアフガンで見たこと・考えたこと」と題してお話をしました。私がアフガンに関わることになった経緯、訪問時の活動、人々との交流の様子、タリバーン政権復活後の女性たちの取り組みなどの紹介をしました。オンラインでの報告で、参加者の皆さんの顔が見えないのが残念でしたが、このような機会を頂けたことを嬉しく思いました。

**今後に期待すること**

依頼を受けるまで、私は「ワンフェスユース」という活動があることを知りませんでした。高校生の皆さんがアイデアを出しあって企画し、主体的に活動をし、自分たちの考えを提言として発表するという活動は素晴らしいと思います。

活動が「フェスティバル」で終わってしまうことなく、大学生になったり、社会人になったりしたときの基盤となっていくことを願っています。また、活動を通して見つかった課題を多くの人と共有し、課題解決に向けて行動していただくことを期待しています。



ユース提言チーム 2023 伴走講師

**林 大介**

模擬選挙推進ネットワーク事務局長／浦和大学 社会学部 准教授

**子どもの社会参加・政治参加が“あたりまえ”の日本にしよう！**

2017年に、「民主主義教育」が充実しているドイツに行った際、保育園を案内されました。高層マンション1階にある保育園は、目の前の芝生広場、遊具、池などがある広大な公園を園庭代わりにしています。しかし公園はできてから10数年が過ぎあはじめています。そこで公園を管理しているベルリン市は、公園を改修するために日々の利用者である保育園児にヒアリングを行うというのです。

ヒアリングでは、4歳の子ども一人一人に、握りこぶし大の緑の球・赤い球がついた長い棒2本を持たせ、公園を散策。行く先々で子どもが「心地よいと感じる場所に“緑”の棒」か「変えたほうが良い場所に“赤”い棒」を地面に挿します。そしてベルリン市の職員がその理由（「砂場の砂がサラサラしていて気持ちいい（緑）」「昔は池で水遊びができたみたいだけど犬が入るから遊べなくなった（赤）」など）を聴き取り公園の改修につなげます。

「子どもはこんな遊具が欲しいに違いない」とおとなが勝手に決め付けるのではなく、子どもであっても市民・主権者として向き合い、その意見を大事にする。まさにこれが、子どもの社会参加・政治参加の土壌を創っています。

国立青少年教育振興機構が2020年に実施した「高校生の社会参加に関する意識調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－」によると、日本の高校生は、「社会問題は自分の生活とは関係ないことだ」と考えている割合が2割未満で中国に次いで低く、「私個人の力では政府の決定に影響を与えられない」「政治や社会より自分のまわりのことが重要だ」「現状を変えようとするよりも、そのまま受け入れるほうがよい」「政治や社会の問題を考えるのは面倒である」と考えている割合が、いずれも4か国中最も高くなっています。

日本の若者は、なぜこうも、社会課題に関心を抱くことができないのでしょうか。子ども時代から、空気を読み、自分の立ち位置を意識することを強要する空気感がある日本社会。他者と異なっても、自分が思ったり考えたことを安心して表明できる環境がない。安心して主張する経験を積むことができきていないから、周りの目や周囲の評価を過剰に意識してしまう。「忖度する主体」を育む風潮がまん延していると言っても過言ではないのでしょうか。

そうしたなか、2023年4月1日、こども家庭庁が発足し、こども基本法が施行しました。子どもを権利主体とし子どもの意見表明を規定したこども基本法が施行となり、その実施主体としてのこども家庭庁が発足するということは、日本社会において、大きな転換点になったと言えます。

しかし、こども基本法の目的に書かれている「子どもの権利条約」（1989年国連採択、

1994年日本批准）は、日本の10－18歳で＜詳しく知っている・知っている9.8%＞であり、＜聞いたことはない59.3%＞という結果となっています。（日本財団「こども1万人意識調査結果」）法律や省庁が誕生したからといってもそこがゴールではなく、やっとスタート地点にたったのです。

子どもは単に「未来」の担い手ではなく、「いま」を生きる主体です。

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth（ワンフェスユース）は、社会課題を知るだけでなく、解決に向けてアクションを起こしたいユース（高校生世代）のためのイベントであり、社会活動です。まさに、いまを生きる主体、主権者として、日本、そして世界のこれからのあり方に対して考え、悩み、議論し、発信する取り組みは、民主社会を成り立たせていくためには不可欠な取り組みです。

子どもの権利条約の普及推進に長年携わってきたR.ハートは、20年以上も前に「子どもたちは、直接に参画してみればじめて、民主主義というものをしっかり理解し、自分の能力を自覚し、参画しなければいけないという責任感をもつことになる」と言っています。住民であり、市民であり、主権者である子どもが、一人の人間として子ども時代から地域づくり、社会づくりに関わることは、市民性の意識を醸成することにつながります。子ども・若者の力をまちづくりに活かすことは、民主主義を実践することとなります。まさに、「地方自治は民主主義の学校」（J・ブライス）なのです。

この間のワンフェスユースを通して、ユースを含めた子ども自身が社会参加・政治参加するためのきっかけが生まれたのは事実です。だからこそ、おとなはもっと子どもの社会参加・政治参加を後押しし、子どもの社会参加・政治参加が当たり前の日本社会に取り組む責任があります。ワンフェスユースの次の展開に期待するとともに、こうした取り組みが全国各地で拡がることを願っています。

2020-2022 サポーター

**鈴木 千花**持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム (JYPS) 元事務局長  
／元関西 NGO 協議会インターン

4年前、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2020 online の閉会式にて、  
「これが私たちからの提言です。」  
と発表をする高校生の方々を見て、心が動かされた瞬間を今でも覚えています。

アドボカシーとは、周縁化されやすい人々の声を社会や政策意思決定の場に届けることにより、誰一人取り残されない社会の仕組みをつくることだと私は思っています。そして、そんな社会の仕組みづくりにおいて「将来世代※」である若者の声は欠かせません。

当時、本イベントにおいて高校生がアドボカシーをすることは初の試みであり、その立ち上げに関わらせていただくにあたり様々な葛藤、プレッシャーを感じていました。

イベント本番を迎えるほんの少し前のことです。「第5次男女共同参画基本計画」において、多くの若者から希望の声が寄せられた「選択的夫婦別姓」の導入について、パブリック・コメント後に報道された政府の発表ではその文言が消去されました。

当時、同計画に向けたアドボカシーに関与していた私は、「やはりユースの声は届かないのか」と心が折れてしまい、アドボカシーという活動の意義・希望を見出せなくなり、無力感に陥りました。ましてやそんな自分が、高校生の方々とアドボカシーという、終わりのないマラソンを続ける資格があるのかと自問していました。

しかし、イベント当日に「他人事じゃない貧困・差別問題」と題した提言内容を発表する高校生の方々やそれを聴いていた参加者の方々を目の前にし、そんな絶望感・葛藤は消え失せ、確かな希望を抱いた自分がいました。

「出る杭は打たれる」

そんな風潮が依然として漂う日本で、社会を変えようと堂々と声を上げる仲間がいる。

高校生の方々と伴走させていただく中で、一番エンパワーされていたのは私でした。

アドボカシーのみならず、こうした「誰一人取り残されない社会」を本気で実現しようとする活動を続けていると、時に絶望し、そんな自分に疲弊してしまうことも多々あります。

しかし、だからこそ、私たちは共に進む仲間と励まし合い、平和への運動を続けます。

人々はこのようにして僅かながらも社会に希望を見出し、社会変革への試みを続けてきたのだと思います。

それから本ユース提言活動は4年続き—そのうちの3年間は伴走させていただきました—扱

う課題や提言の内容は違うものの、堂々と、そして然るべき場所にその声を届ける高校生の姿に変わりはありませんでした。

ユースが提言活動をはじめとする様々な市民運動を主催したり、参加するにあたりこの社会にはまだまだ多くの障壁があります。経済的・社会的脆弱性に起因する機会の不均衡や、権力の不均衡によるハラスメントをはじめとする多様な暴力等は、私自身も経験してきたことであり、未だ多くのユースが直面している課題です。

そんな中、私は本ユース提言活動における、「ユース（高校生）の方々が安心して自分たちの声を発して、その声を届ける場所を共に模索する」、そんな姿勢に共感し、この3年間活動をご一緒させていただきました。

この場を借りてそんな場をつくり、守り続けてくださった関西 NGO 協議会の仲井さんをはじめ、職員の方々、そして講師を務めてくださった方々、ご協力いただいたすべての皆さまに感謝申し上げます。そして何より、本ユース提言活動にメンバーとして参加された皆さまに敬意を表するとともに、感謝の意を述べたいと思います。

今後もこのような活動が関西のみならず、様々な地域で続いていくことを願っています。

※ 1987年に国連の「環境と開発に関する世界委員会」がまとめた“Our Common Future”（私たちの共通の未来）において、“Sustainable Development”（持続可能な開発）とは、「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在のニーズを満たす開発」と定義されています。



ユース提言セクション 2020 メンバー、ユース提言セクションサポートメンバー (2021・2022)

## 菅 礼実

2020 年度にワンフェスユース高校生実行委員の一員としてユース提言セクションに参加させていただき、早くも 4 年が経ちました。「アドボカシー」という言葉に初めて触れ、「アドボカシーって何？」という状況からスタートした活動は、高校生実行委員の仲間とディスカッションを繰り返す中で、自身の視野を広げ意識改革ができた、とても意義あるものだったと感じています。

アドボカシーを気に掛けるきっかけとなり、社会課題に対する考え方はもちろん、「高校生そしてユースだから無理」という自分の中でのネガティブな思い込みを「高校生そしてユースだからこそできることは？」とポジティブに変換できるようになったことが、この活動を通じた大きな成長であり、高校生ではなくなった今でも活かしている、私を形作っているエッセンスだと思っています。

2021 年度は、オンラインで大学生サポーターとして高校生実行委員の皆さんの伴走をさせていただきました。オンラインだけのサポートや、海外にいたため時差がある中での活動で、何かもう少しできないかともどかしさを感じることもありました。しかしそのような参加方法の中でも、サポーターの立場になってこそ見えた、高校生の主体性を何よりも大切にしようとする運営委員会の皆さんの姿勢に感銘を受け、こんなにもユースの声を大切にしていだける環境があるんだ、と希望を感じました。

そして、高校生実行委員の皆さんがそれぞれの強みを一つにして声をあげること・それに込められた想いを客観的に見たことで、ユース提言の力強さと価値を思い知りました。

ワンフェスユースの活動から離れた後も、アドボカシーの重要性を感じる事が定期的にあります。最近では、社会人として社会経験を経てから海外の大学院に進学し、社会学を学んでおられる方とお話しする機会がありました。そのお話の中で、「アカデミア（学問の世界）って理想主義だと思っていて…」という社会人の方から聞くからこそ説得力があるように聞こえたその言葉が私の中を駆け巡りました。確かに、「こういう理論がある」「こうなるといいよね」と、理想が多い世界ではあるのかな、とどこか納得すると同時に、それに対して何も言えなかったことへのモヤモヤがありました。

今振り返ると、学ぶことで何かを良くできるはず、と思い続けていた私には「理想なのか」と悔しく、無力に感じたのではないかと思います。そんな時に私の頭によぎったのがアドボカシーです。学び続ける中で課題の新しい切り口に気付くことができ、その課題が解決される理想が見えているなら、そのギャップを埋めるためにビジョンを作り、働きかけていくのがアドボカシーなのではないかと、私の中で腑に落ち、それが今も学ぶことへのモチベーションになっています。

私はイギリスの大学でアニマルウェルフェアを学び、その一環で履修したアニマルアドボカシーの授業で、現代の社会運動としての動物擁護活動について、種差別について、動物関連の国際法などに関して、強く課題意識を持ちました。今はこの分野から離れていますが、大学卒業後、就職し社会経験を積んだ上で、またアニマルアドボカシーという形でアドボカシーに関わりたいと思っています。アカデミアで学ぶだけではなく、実際に立場が違う人・動物が課題を抱える現場に足を運び、完全に理解・共感することはできないながらも思いを馳せ、より包括的な社会の実現に貢献していきたいです。

最後になりましたが、このような素敵な学びと実践の機会を支え、応援し続けてくださっているすべての皆様、そして今回このように 4 年間の振り返りの機会・また時間を経ても交流の機会をくださった関西 NGO 協議会の皆様に、この場を借りて心より深く感謝を申し上げます。これからもこのようなユースのための事業がさらに広がっていくことを祈っております。



## れいな

## 挑戦の原点

高校一年生の時、私はワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2021 に参加することを決意しました。当時の私は、学校外のイベントや学内の委員会への参加なんて考えられないほど消極的な性格でした。しかし、そんな私が、応募締め切り当日の数時間前まで参加を悩み、勇気を振り絞って応募したことを今でも鮮明に覚えています。その選択をした自分を今も誇りに思っています。

そしてワンフェスユースでの参加が決まり、活動していく中で、環境活動家の佐竹敦子さんとの対話の機会があり、「環境改善には個人の努力だけでは不十分であり、大きな組織の変革が必要だ」という重要な視点をいただきました。その言葉を受け、当初は高校生という個人への提言を行おうと考えていましたが、学校内の環境に目を向けることにしました。そして学内の自動販売機で大量に廃棄されるペットボトルを問題とし、その改善策の一環となるウォーターサーバーの導入を提案するため、学校へ向け提言書を作成し、学校関係者にプレゼンを行いました。

ワンフェスユース終了後もウォーターサーバー設置のために半年以上かけて活動し、最終的に学校での 2 つのウォーターサーバーの設置が実現しました。ワンフェスユースの活動が終わった今も私は、新しい挑戦を辞めず、そして環境問題に限らず、様々な活動を続けています。そのきっかけは後にも先にもワンフェスユースだったと思います。

私は今春高校を卒業後、9月からマレーシアの大学に進学する予定です。新しい環境に身を置くことに期待と不安がありますが、ワンフェスユースへの参加を通じて、新たな挑戦の先にある楽しさを知ることができました。ここでの経験は、私にとって海外の大学に進学するという決断に影響を与えた一因であると感じています。

ワンフェスユースで新しい挑戦に取り組む中で、数々の素晴らしい出会いと学びに恵まれました。そして、ここでの活動は私にとって初めて本気で頑張ったと自信を持って断言できる経験となりました。ワン・ワールド・フェスティバル for Youth2021 で関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## T.H.

私はワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2022 のユース提言セクションで活動し、メンバーと共にジェンダー教育に関する提言を文科省総合教育政策局の方々に向けて行いました。LGBT という言葉が社会で広まり、認知されるようになってきた一方で、性的マイノリティへの偏見・差別や、社会構造上の課題が残っている現状をふまえ、学校におけるジェンダー教育の必要性を訴えました。

この活動を通して学んだことはたくさんあります。まず、ジェンダー、セクシュアリティをとりまく問題について考えを深めることができました。この問題に詳しい方とお話をさせていただく機会があり、家族や友達と話し合うだけでは得られない、長年考え続けてきたからこそ得られた考え方にふれることができました。

また、協力のパワーについても学びました。ユース提言セクションでの活動をなんとかやり遂げられたのは、関西 NGO 協議会の皆さんをはじめとするたくさんの方々、様々な面で協力してくださったおかげです。未熟な自分でも、協力のパワーがあれば、活動したいことを実現できると学びました。それだけでなく、ユース提言セクションのメンバーが少なかったために何人か他セクションから応援に来てもらったことは、本当に助かりました。自分が中心となり、誰にどのような仕事をしてもらうのかを考えることは初めてで、上手くいかなかったことも多かったですが、とても良い経験となりました。

高校生だからこそ起こせる活動、働きかけやすい問題はたくさんあります。次年度のユース提言がなくなることは残念ですが、次年度からも、他のセクションで高校生が問題意識をもって活動してほしいと願います。最後となりましたが、今回ユース提言冊子に寄稿させていただけてとても嬉しかったです、ありがとうございました。

## こうたろう

## 何を以て、何と為すか。

ワンフェスユースにおいて、ユース提言活動を行う高校生チームをアドセク（アドボカシーセクション）と呼ぶことがあるのですが、“アドボカシー / ADVOCACY” という言葉やその意味をご存知でしょうか。小中学生は疎か、おとなでも知らない方が多いのではないのでしょうか。大学院以上のレベルの単語のようで、私も携わらせていただくまで知りませんでした。この言葉の語源は、ラテン語の“ADVOCARE/力を貸す”で、辞書を引けば、「弁護」、「支持」、「鼓吹」、「唱道」などが掲載されています。

私が社会問題と向き合いはじめたきっかけは、社会の現状を知った時の遣る瀬無い気持ちでした。しかし、当時の私は、自分に何ができるかもわからず、理想を思い描くだけでした。高校の生徒会執行部でも活動している中、ある言葉に出会いました。それが、“何を以て、何と為すか。”です。この言葉から、自分自身が社会や様々なことに目を向け、課題を見つけ、どうしたら現状より1mmでも1%でも良くすることができるのかを考えて、行動することが大切だと気づかされました。

その行動手段の1つが、ワンフェスユースであり、アドセクだと思います。“アドボカシー”という言葉が難しく感じなくて良いと思います。私たち子どもでもできる1つの行動手段だと思います。

一部のおとなの方に、「子どもなんだからそんなことをせず、大人に任せておけばいいんだ。」と言われることがあります。果たして正しいのでしょうか。“子どもの視点・考え”これは到底、おとなには思いつくことも、考えることもできません。無論、その逆も同じです。「私たちも子どもだった。」それはその時子どもだったことにすぎません。今は違います。時代も違えば、社会の風潮も大きく違います。決して、おとなの視点や考えを否定しているわけではなく、子どもの視点や考えも重要な要素の1つだと考えています。私たちは今、高校3年生で大人になります。そんな私たち子どもも、社会問題に対して他人事ではいけないはずで、私たちができることは、微力かもしれませんが、しかし、それは決して無力ではないと思います。

そんな私を大きく成長させてくれた、視野をさらに広げるきっかけをくれたのは間違いなくこの活動です。最後になりましたが、一緒に活動してくださった2人、関西 NGO 協議会の皆様、活動にご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

ユース提言チーム 2023 メンバーからの一言 

K.Y

私は以前、別の団体で食に関する政策提言を体験して、その経験を生かせるのではないかと考え、今回実行委員に応募させていただきました。私たちのチームは若者の主権者意識向上という身近でありながらも、規模の大きいテーマに取り組みました。なぜ若者が政治に関心がないのかという問いに当事者の私たちが真摯に向かい合いました。

途中ゴールを見失い、チームとしてシンポジウムをどうしていくのかが不透明になった時期もありましたが、最後には成功を収めることができたので良かったです。なにより、社会をこれからもよりよくしていこうという気持ちが一層強まりました。そのためにどんな形であれ、社会についてこれからも考え続けたいです。

P.S

私は文化祭でのSDGs活動がきっかけで、今回ユース提言チームに参加しました。学校で社会問題について学んではきたものの、「提言」という形で知識をアウトプットするのは初めてだったこともあり、最初は不安も沢山ありました。けれども他のメンバーやいろいろな方々のサポートに支えられながら、紆余曲折あったものの楽しく活動を行うことができました。

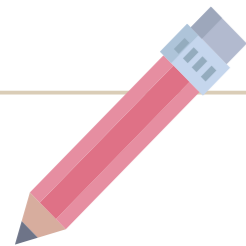
シンポジウム本番では、自分が社会問題について発信する側に立ったことの感動、そして他人に同じ熱量を持って実際に行動を移してもらうことの難しさを感じました。提言チームとしての活動は終わってしまうけれど、この経験を活かしてこれからも様々な社会問題に目を向けていきたいです。

T.K

私は前年度のワン・ワールド・フェスティバル for Youthに参加し、難民をはじめとする世界の様々な問題について知り、興味を持つことができました。ワンフェスユースをきっかけに世界の問題について興味を持って多くのことを調べるようになったので今度は自分が誰かのきっかけになりたいと思い実行委員として参加しました。

チームの仲間と日程を合わせたりオンラインで会議をしたりなど難しく感じることもありましたが、全員で提言の完成を目指して最後までやり切ることができました。活動を通して、初対面人との関わり合いや話し合いの進め方など多くのことを学ぶことができました。これからも世界のために貢献できるように学び続けていきます。





## 編集後記

ユース提言活動事業担当者 関西 NGO 協議会  
仲井 友佳子

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth (以下ワンフェスユース) は現在 10 周年ということで転換期を迎えており、ユース提言活動についても一度見直しを図ろうと、一旦 2024 年度は活動を行わないということが決定しています。そのような中、今回本活動の一つの区切りとして、このような形でこれまでの活動をまとめることができたこと、大変有難く思っています。

担当者としてこの活動に携わることは、決して簡単な仕事ではありませんでした。高校生の意思を最大限尊重しながら、大学生サポーターと連携しつつ適切な距離感で活動をサポートすること、高校生が必要とする情報を適宜提供すること、必要に応じて講師の方と高校生との間に入ること。どれも繊細で難しい調整であり、常に正しくやれていたかどうか、私も自信があるとは言えません。また、高校生の活動時間に合わせて、日中の業務終了後、夕方から夜にかけて一緒にミーティングをするということも珍しくありませんでした。しかし、高校生メンバーが、何度も話し合いを重ねながら、少しずつ自分たちなりの答えに近づいていくとき、ぎりぎりまで準備をしながらも、自分たちで作上げたシンポジウムを大勢の参加者・関係者を前にしてやりきったとき、提言先の大人の前で自分の意見をしっかりと述べたとき、そうした一つひとつの瞬間に立ち会えたとき、自分がそこにいられて良かったと心から感じられる、本当にやりがいのある仕事であったことも事実でした。

今回この冊子の作成を通して、特に各年のメンバーから寄稿をいただけたことで、当時どのような思いでこの活動に参加していたのか、またその後どのようなことを考え、それぞれの選択をしてきたのかを垣間見られたことも、担当者としては大変嬉しいことでした。活動期間中はなかなかそうした話をする余裕が無く、また特に 2020 年度、2021 年度はコロナ禍でオンラインを中心とした活動であったため尚更、この寄稿は私にとって、ユース自身の貴重な声となりました。

今改めて、このユース提言活動は、この冊子に関わってくださった皆さん、お名前を掲載させていただいた皆さんをはじめ、数えきれないほどの沢山のの方々のご協力があって、この 4 年間続けてこれたものだったということを実感しています。それぞれに幅広い形、深さがあったと思いますが、そうして関わってくださったすべての皆さんに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

この冊子が、たとえささやかなものであっても、今後のユースのあらゆる活動の、そして社会・世界を変えようと一歩を踏み出すユース自身の、支えになることができれば、と願っています。

### ●関西 NGO 協議会について

私たちは、主に関西に活動拠点をおく NGO が全国・世界の NGO/CSO と連携を強め、NGO/CSO 同士のネットワークを形成し連帯を促進することで、それぞれの活動をより充実・発展させることを目的としたネットワーク型の国際協力 NGO です。

下記にご紹介するような普及啓発活動の他、政策提言活動や相談対応、助成事業など、様々な活動・事業を行っています。詳しくは HP をご覧ください。

関西 NGO 協議会 : <https://kansaingo.net/>



### ●SDGs in KANSAI について

SDGs in KANSAI は、市民社会の立場から、他セクターとのパートナーシップを重視しつつ、「自然・環境」「経済」「社会」の調和と、市民の意思を反映させた決定のプロセスを大切にしている取り組みです。SDGs が示している課題は国際社会、日本社会、地域社会それぞれのレベルで私たちの生活と密接に関わっています。

2030 年の関西、日本、世界を想い、ぜひ私たちと一緒に SDGs について考え、それを行動に移し、誰ひとり取り残すことのない社会の実現に向けて歩き出しましょう。詳しくは HP をご覧ください。

SDGs in KANSAI : <http://kansaingo.net/kansai-sdgs/>



### ●ワン・ワールド・フェスティバル for Youth について

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth は、(特活) 関西 NGO 協議会が主催する、高校生を中心とした国際協力・SDGs・多文化共生のフェスティバルです。問題を知るだけでなく、解決に向けて何かアクションを起こしたいというユースが「最初の一歩」を踏み出すべく、「高校生実行委員会」や「ボランティアリーダー」として、定期的に会議を重ね、テーマの決定、企画、運営、広報など準備をし、開催しています。詳しくは HP をご覧ください。

ワン・ワールド・フェスティバル for Youth : <https://owf-youth.com/index.html>



### ■ユース提言活動 4 年間のあゆみ 2024 年 3 月発行

監修・発行 特定非営利活動法人関西 NGO 協議会  
〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町 2-30 4 階  
TEL : 06-6377-5144 FAX : 06-6377-5148  
メール : [knc@kansaingo.net](mailto:knc@kansaingo.net)

編集・執筆 仲井 友佳子 (提言書・寄稿を除く)

装丁・デザイン 株式会社パーキーパット・デザインズ

印刷 有限会社紉書房

本冊子の内容及び使用されているイラストや写真の全部または一部を無断で複製・複写することは禁止します。  
本調査の実施および本冊子の作成は、独立行政法人環境再生保全機構「2023 年度地球環境基金」の助成を受けて行いました。



この印刷物は、自然エネルギー (バイオマス発電 7.5kWh) を使用して、再生紙に印刷しました。



# 関西NGO協議会

